

東京藝術大学のいま、これから。

# 藝える



# 4

藝える 第四号

# 藝える

東京藝術大学広報誌『藝える』第4号

発行日  
2019年3月25日

編集・発行  
東京藝術大学「藝える」編集部

編集長  
藤崎圭一郎

アートディレクション  
有山達也

デザイン  
岩淵恵子(アリヤマデザインストア)  
中本ちはる(アリヤマデザインストア)

写真  
富田里美  
(表紙、P1~31、P38~39)

校閲  
西村 knack 雅彦

編集  
小林沙友里

事務局  
東京藝術大学社会連携課

印刷  
シナノパブリッシングプレス

表紙図版

**Nippon Gakufu**  
**Sechs Japanische Volkslieder**  
**Rudolf Dittrich**  
Breitkopf & Härtel 1894



**Nippon Gakufu.**  
Six  
Japanese Popular Songs  
collected and arranged  
for the pianoforte  
by  
**RUDOLF DITTRICH.**  
Pr. M. 3. - n.

日本楽譜

理日非士

東京藝術大学

Druckerei

EIPZIG, BRÜSSEL.

© Hasegawa, Tokyo.  
Eigentum der Verleger für alle Länder.  
**BREITKOPF & HÄRTEL,** LONDON, NEW YORK.  
Sole Agent for Japan, China & Hongkong: J. G. DOERING, Yokohama

東京藝術大学  
表紙図版

# 藝える



「藝える」は「**うえる**」と読みます。藝と芸とはもともと別の字で、芸の訓読みは「くさぎ(る)」、つまり草を刈ること、一方、藝には両手で捧げるように苗木を植えるという字義があります。さて、昨年9月、本学上野キャンパスに東京藝術大学国際芸術リソースセンター(IRCA)が竣工しました。この施設の中には、拡充されて使いやすくなった附属図書館をはじめ、学びの共有スペースとして新設されたラーニングcommons、藝大のコンテンツを発信する場としてリニューアルされた藝大アートプラザ、大学院の一部の研究室などが入っています。——ということで、今号は図書館と本の特集です。芸術という光に向かって伸びる苗木たちが大地にしっかり強い根を張れることを願って、本との出会いのすすめをつくってみました。

藤崎圭一郎 / 美術学部デザイン科教授・本誌編集長

目次

特集

01 藝大生のための  
**本特集**

02 **お宝をさがせ!**  
**藝大図書館 稀覯本探訪**

「美術一等国」への夢と野望＝佐藤道信  
新しい時代の新しい音楽を＝大角欣矢

14 **身体で感じ取る!**  
**図書館の未来、ここにあり。**  
桂英史

18 「学生にすすめたい」  
「人生を変えた」  
先生にきく  
**私の一冊**

32 まんが  
**藝大アートプラザの野望**

34 **授業SANKAN**  
目指せマエストロ編

1時間目＝音楽学部 指揮科  
2時間目＝美術学部 建築科

38 **藝える人 荒井里桜**  
音楽学部器楽科 ヴァイオリン専攻2年

40 **お知らせ**

藝大生のための

# 本特集

GRAMMAR OF ORNAMENT

PLATE VI



EGYPTIAN. NO. 8

『The Grammar of Ornament』  
Owen Jones Day and Son 1856

拾い読みでもいいのです。眺めるだけでもいいんです。  
大切なのは、本との出会い。ちょっと物の見方なんぞを  
変えてみたくなる、素敵な本との出会いに誘います。

## 佐藤道信 さとう・どうしん

美術学部芸術学科教授。専門は近代日本美術史。1956年秋田県生まれ。東北大学文学部東洋日本美術史専攻卒業、同大学院修士課程修了。板橋区立美術館学芸員、東京国立文化財研究所研究員を経て1994年に助教授、07年より現職。著書『明治国家と近代美術』でサントリー学芸賞を受賞。



# お宝をさがせ! 藝大図書館 稀覯本探訪

長い歴史を持つ藝大図書館には、  
自慢の貴重史料が眠っている？  
美術学部、音楽学部で歴史を研究する  
両教授が、近代芸術の揺籃期の  
“お宝”、本を蔵出し、ご紹介します。

文＝大谷道子

本棚を見ればその人がわかる、と申します。ならば、それは場についても同様なのでは？日本の芸術教育の雄・東京藝術大学の附属図書館。そこには旧制東京美術学校、同東京音楽学校から引き継がれた稀覯本が数々あるとの噂を聞けば、もう訪ねるしかないでしょう。

ということで、昨秋リニューアルオープンした藝大図書館へ。まずは美術部門から貴重史料を拝見する。選書と解説は、美術学部芸術学科教授の佐藤道信先生。最初の一冊はいかにも歴史を感じさせる重厚な古書だが、目を奪われるのはその大きさ！（右ページ参照）

### 「美術一等国」への夢と野望

「大きいでしょうか？これは、岡倉天心が欧米視察旅行で買ってきた本のうちの一冊。ヨーロッパの装飾図案の図鑑です。当時、向こうではジャポニスム（＝日本趣味）が流行していたわけですが、日本でも図柄や図案、模様をさらに改良しなくてはという動きがあった。そのためにも、まずは西洋の状況を調査しようとしていたんですよ」

藝大の前身・東京美術学校設立の祖で二代

校長も務めた岡倉天心手ずから選んだ本とあれば、稀少中の稀少な本。歴史をおさらいすると、学校設立直前の1886（明治19）年の秋から翌87年にかけて、岡倉天心（当時は覚三）はお雇い外国人のアーネスト・フェノロサとともにヨーロッパ、アメリカを旅して

### 『The Grammar of Ornament』 Owen Jones

Day and Son 1856

ギリシャ風、ローマ風といった欧州伝統の装飾パターンをカラフルな石版画で収めた図案集。「いずれ日本の図案を輸出することも念頭にあったのかも。その調査のためにも購入したんだと思います」と佐藤先生。重さはざっと5、6kg。



仏教やオリエント世界の影響を感じさせる図案も多々。「ギリシャは西洋の東端であり、かつ東洋の西端でもありますからね」と、佐藤先生。

B126  
R17-1  
1

RAFAEL  
WERK

## 『Rafael-Werk』

Adolf Gutbier 1875

《小椅子の聖母》をはじめ、ラファエロの代表作の数々が精緻な印刷で再現されている。「西洋美術には核となる天才がいる。日本からもそうしたスターを輩出しなくては思っていたのかも」と佐藤先生。伝記を含めた3冊組。



いる。本はその際に購入したもので、図書館に記録が残るのは52冊。画集、図鑑のほか美術史など、その種類はさまざまだ。

「こちらはラファエロの画集(P44~5)。最終的には、西洋画科の教材になったと思われます。東京美術学校は、設立当初は日本画と木彫、工芸だけだったんですが、もし西洋画科があればもっと画集が多くなっただでしょうね」

実はこの時、本以上にたくさん購入されたのは、西洋の美術品を写した写真類だった。

「全部で3600枚近くあります。この視察旅行の費用が全体で1万円、今の価値で1億円くらいなんですが、うち旅費が500円(現在の500万円相当)で日当が1日10円(同10万円)。写真の購入に2800円、ざっと3000万円くらい使っています。費用? それはもちろん政府から。お金の心配があったら、絶対買えませぬよ。ハハハ」

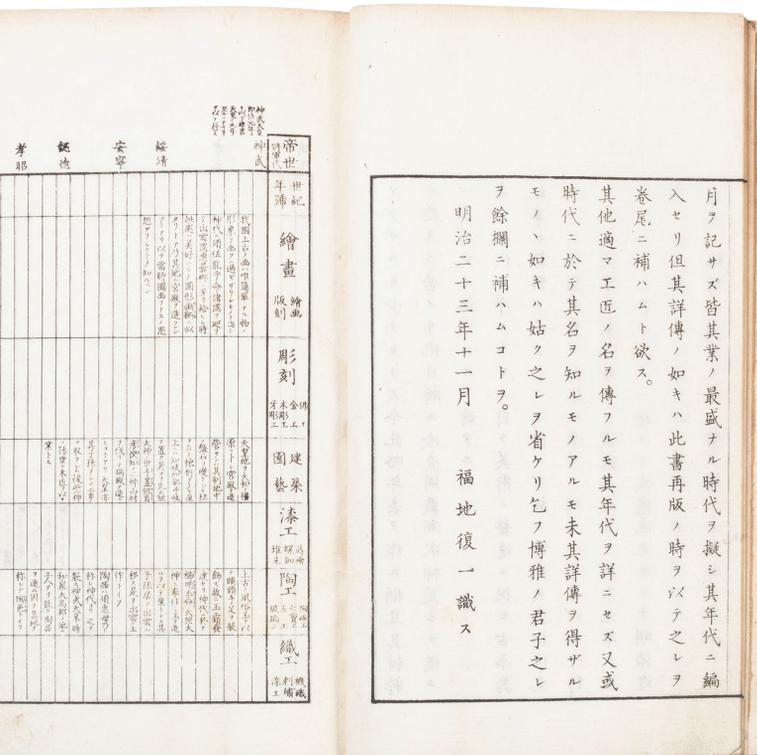
お財布は国。天心先生楽しかっただろうなあ……でも、大盤振る舞いにはもちろん理由がある。日本初の官立美術学校の設立に続き、大日本帝国、そして産声をあげたばかりの日本美術界にはビッグイベントが待っていた。

1900(明治33)年に開催されるパリ万国博覧会(万博)である。

「当時、史上最大規模だったこの万博では、その国の歴史を出品してくだされいと要請されています。日本は、1889(明治22)年に大日本帝国憲法が公布され、その後の日清戦争(1894~95年)に勝利してアジアの盟主という意識も生まれていた。出品される美

術品は当然、一等国にふさわしいものでなくてはならなかったわけです」

ジャポニスムでもてはやされた浮世絵や工芸品は庶民の娯楽。万世一系の帝国美術にはやはり支配階級の公家や武士の所蔵品を、というところで、帝国博物館(現・東京国立博物館)美術部長も兼任していた岡倉天心の号令のもと、一斉に古社寺宝物調査が進められた。



『美術年契』  
福地復一  
金港堂 1891

「絵画」「彫刻」「建築・園芸(当時は芸術の1ジャンルだった)」「漆工」「陶工」「織工」の6項目で日本美術を網羅。編者の福地は図案科の初代教授だが、天心排斥運動の中心人物としても名を残すことに。



日本各地に眠る、お宝の洗い出しである。

「仏像などは、明治のはじめには廃仏毀釈（維新後、神仏分離によって起こった仏教破壊運動）で壊されたり、二東三文で外国に売られていたりしたわけですからね。その価値が、たった20年ほどで180度変わった。そうした品を、芸術品として演出して写真に収め、印刷する。その際に、天心たちが買っ

てきた写真が参考にされたんでしょ」

調査をもとに、日本初の美術史年表も編まれた。同じく図書館所蔵の『美術年契』には、絵画、彫刻（これら名称も当時発明されたものだった）などオールジャンルの代表的作品が、制作年ほか史的記述とともに綴られている。

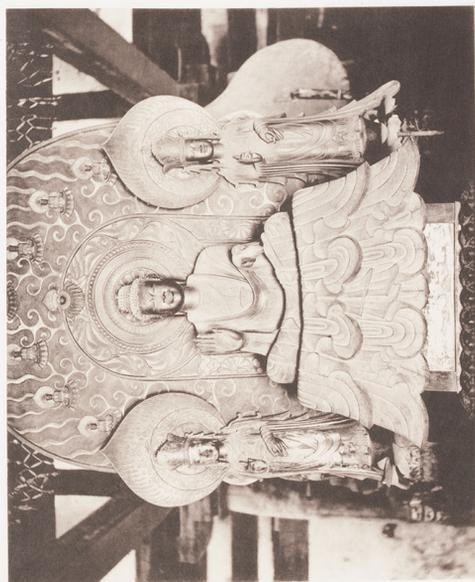
「日本美術を世界に示す前に、まずは歴史の大系を明らかにしなくてはならない。宝物調

査をして写真を撮って年表をつくって……と

いうこれら一連の作業は、すべてつながっている。まさに威信をかけた国策だったんです」

そうして、パリ万博に出品する日本初の美術全集が誕生した。題して『日本帝国美術略史』。藝大図書館には、パリ万博に出品された仏語版初版が残されている。ずっしりと量感をたたえた装幀（お金に糸目はつけていないでしょう」と佐藤先生）。ページをめくると、埴輪、刀剣から仏像、工芸品に至るまで、まさに帝国の宝（実際、この際の調査をもとに国宝が整備されるのである）の数々が、当時一流の写真・印刷技術によって美術品として表現され、収められている。

実にインペリアルな美の結晶。ここに至るまでのすべての作業の牽引役を担ったのが、



『Histoire de l'art du Japon』  
Maurice de Brunoff 1900

のちに国宝に指定される法隆寺の《釈迦三尊像》をはじめ、日本美術の粋を集めた豪華本。写真は最先端のコロタイプ印刷。文部省・宮内省が編纂に関わり発行元は農商務省とまさに国家事業。序文は帝国博物館総長・九鬼隆一が執筆。

ほかならぬ岡倉天心だった……のだが、そこは激動の時代。この本が目の目を見るほんの2年前、彼は世に言う「美術学校騒動」によって職を追われ、東京美術学校から姿を消していた。あの希望と意欲に燃えた(であろう)視察旅行から、ほんの12年後のことである。「いかにも権力闘争の時代らしい浮沈ですが、このトータルプランを成し遂げた天心は、やはり天才だったと思いますよ。美術史の祖であり、美術教育の祖であり、かつ文化財保護の祖であり……美術をめぐる、日本近代の制度をつくった人だったんです」

日本の発展を美術面から推進した稀代の名プロデューサー。その夢の原点と成果が、今は図書館の奥深くに眠っている。

### 新しい時代の新しい音楽を

続いて、音楽学部楽理科の大角欣矢教授をプレゼンターに、音楽分野の稀少史料を拝見する。まず目の前に開かれたのは、おお、楽譜ですよ、楽譜。しかもこれ、見覚えが。「そう、有名な『バイエル』です」

バイエル！ やりましたよ、やりました。

たぶん日本でピアノを学ぶ人は、必ずその初期に開く有名教本。記録によると、バイエルが日本にもたらされたのは1880(明治13)年。藝大音楽学部の前身、東京音楽学校のそのまた前身である文部省直轄の教育機関



## 大角欣矢

おおすみ きんや

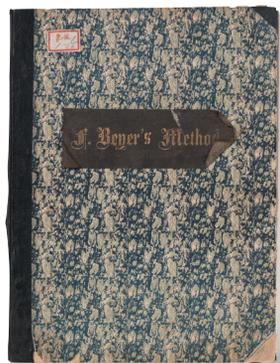
音楽学部楽理科教授。1960年兵庫県生まれ。83年、音楽学部楽理科卒業。86年、大学院音楽研究科修士課程音楽学専攻修了、91年に同博士後期課程単位取得退学。助手、助(准)教授を経て2009年より現職。著書に『ポケット楽典』、共著に『ピアニスト小倉末子と東京音楽学校』などがある。

「音楽取調掛」の頃である。

「取調」というと犯罪捜査のようですが、要は調査研究をするという意味。明治という新しい時代、学校のカリキュラムを定めるにあたって、欧米にある音楽という学科を導入したわけですが、何をどう教えていいのかわからない、だから手始めに調査研究をと。この長だったのが、伊澤修二という文部官僚の中に東京音楽学校の初代校長になる人です。まず、西洋音楽を学ぼうとアメリカから招いたのが、音楽教育家のメーソン。彼がバイエルを持ち込み、そこから140年近く続いている。おそらく世界でも、これほどバイエルが普及している国は他にないのではないかと」

自らもアメリカ・マサチューセッツに留学し、音楽教育を学んだ伊澤。単に欧米並みに音楽教育を普及させるだけでなく、彼が掲げた目標は、さらに大きなものだった。

「西洋の進んだ音楽は勉強し、テクニクも取り入れる。でも、日本の伝統音楽もちゃんと研究して、それらを合体させて、和洋折衷の『国楽』……日本のナショナル・ミュージックを生み出そうと。そのための新しい時代



## 『Elementary Instruction Book for Piano』 Ferdinand Beyer

C. Prüfer 1800年代

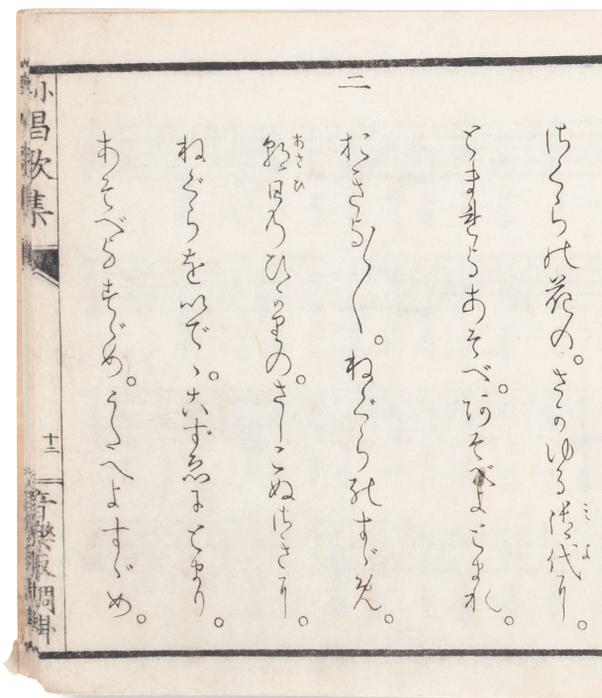
音楽取調掛時代、ルーサー・ホワイティング・メーソンによってもたらされた、おそらく日本最古のバイエル。破損箇所には和紙を当て、手書きで音符が補われている。当時、輸入楽譜は超貴重品。いかに大切に使われていたかがうかがえる。ちなみに現在販売されている版も、表紙は青色。





『小学唱歌集 初編』  
文部省音楽取調掛 1881

「蝶々」のメロディーは、もとはドイツの民謡だという。世界各国でさまざまな詞がつけられており、アメリカでは「Boat Song」。「ボートを漕ぐときの歌。オールを動かす腕の動きと蝶々の羽ばたきが重ねられた、なかなか考えた歌詞です」と大角先生。作詞は国学者・野村秋足。



SAKURA.

Sakura! Sakura!  
Taya! no sono wa  
Mi-satsu kagiri  
Kasumi ka kumo ka,  
Nisi to iware,  
Iyayi! Iyayi!  
Mi ni yukani!

**KIRSCHBLÜTHE.**  
Kirschblüthe! Kirschblüthe!  
In dem Lenzeshimmel,  
So weit man ihn überblicken kann,  
Sind sie Wohl oder Weiler?  
O seist denn Blüthenkraft verbreitet sich.  
Wahln denn, wohlan denn!  
Laest uns schone geiten!

**CHERRY-BLOSSOMS.**  
Cherry-blossoms! Cherry-blossoms!  
As far as one can see  
In the spring heavens,  
Is that mist or cloud?  
No! for the fragrance of the blossoms diffuses itself.  
Come then, come then!  
Let us go and see them!

\* Taya! poetischer Ausdruck für den dritten Monat altjapanischer Jahreszeitbezeichnung.  
\* Taya! a poetical expression for the third month of the ancient Japanese calendar.

**Semplice. M.M. ♩ = 112.**

*poco rit.*

*a tempo*

*poco rit.*

*rit.*

*pesante*

3. Mit Kotobegleitung.

*dolce*

*pp*

*molto tranquillo*

*poco rit.*

*a tempo*

*mp*

*poco rit.*

*pp*

*rit.*

*pesante*

20117



### 『お菊幸助』

日本蓄音機商会 1910

藝大図書館所蔵のうち、最古の平円盤のひとつ（それより前は筒形の蝋管）。超貴重史料ゆえ針を落とすことが叶わないが、『お菊幸助』は同名浄瑠璃を取めたものと推測される。盤を製作した日本蓄音器商会は、現・日本コロムビア。

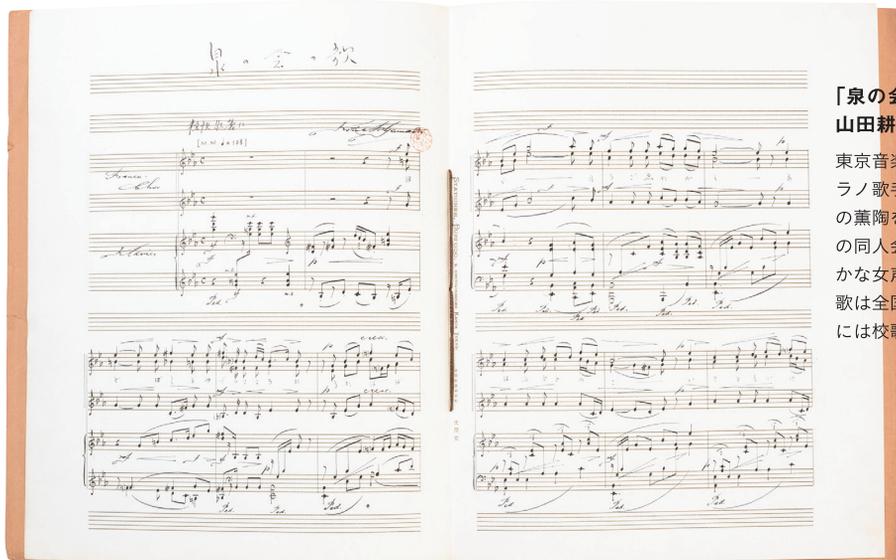
の音楽教育をつくるというのが、音楽取調掛のもととのコンセプトだったんです」

その音楽取調掛が編纂し、全国の小学校に頒布したのが、1981（明治14）年発行の『小学唱歌集』（P11）。初編・第二編・第三編と3冊あり、クラシツクな和綴じの体裁ながら五線譜が使われており、今とはメロディーの違う「君が代」のほか、西洋民謡などに日本語の歌詞をつけた「蛍（蛍の光）」「蝶々」など、メジャーな楽曲多数。取調掛、仕事早いぞと感心しながらページを繰っていると、『蝶々』の歌詞を見てください。今と少し違っているでしょう？」と大角先生。

「ソシミ、ファレレ、というメロディーは今と同じ。でも、今の歌詞で『さくらの花の花から花へ』の部分、『さくらの花の／さかゆる御代に』となっている。要するに、天皇陛下のもと繁栄するこの世界で自由ののびと遊びなさい、という内容なんです」

むむむ、さすがは帝国の教科書。そういえば、伊澤修二が記したこの唱歌集の序文も、〈およそ教育の要は、徳育・知育・体育の三者にあり。小学校にありては徳性の涵養（かんよう）をもって要とすべし〉と、やや仰々しい。それには、音楽を受け入れる社会の側の時代的特性が色濃く影響しているのだという。

「伊澤はむしろ、最初は体育としての効果に興味を持っていたようです。歌を歌うと肺が強くなって健康にいいと。ただ、この頃の人にとつて音楽といえば、まだお座敷で三味線を弾いて歌う、そんなイメージが強かったんだと思います。『何で子どもに歌なんか』という。だから、国民として国と美しい風土を愛し、陛下を敬い……といったように、徳育にシフトした書きぶりになっている。学校で音楽を学ばせるには、相当な根拠付けと理論



### 『泉の会の歌』

山田耕祥 1934

東京音楽学校の教師も務めたソプラノ歌手・荻野綾子と与謝野晶子の薫陶を受けた詩人・深尾須磨子の同人会「泉の会」の会歌。たおやかな女声三部合唱。山田作曲の校歌は全国にあるが、東京藝術大学には校歌がない。紺屋の白袴？



紙の本が普及する前、音楽の授業で使用されたという壁掛けの大型譜面「掛図」。当時アメリカからメーソンが輸入したものが残る。

武装がなければならなかったんでしょ」

1887(明治20)年に東京音楽学校が開校。西洋音楽の導入、普及と同時に、日本伝統の音楽の掘り起こしも進められた。経年変化した紙の上に今も色鮮やかな和風イラストレーションが躍る『Nippon Gakufu』(P1)は、その頃に編纂されたもの。「JIDUKI-UTA(地搦歌)」「RYUKYU-BUSHI(琉球節)」「MEDETA(めでた)」はウェディングソングと記されている。

「編纂したルドルフ・デイトリヒは、東京

音楽学校がスタートした翌年、オーストリアから呼んだ外国人教師のひとり。音楽史的にも重要な人物ですが、彼が在任中に日本各地の民謡や地唄などを聴き取って、ピアノ曲にアレンジしたものです。ドイツの出版社から出版されているので、世界でもそれなりに売られたんじゃないでしょうか」

美術同様、ここでもジャポニスムの追い風が。さらに音楽学校は、消えゆく伝統音楽を守る試みとして紙以外のメディアも活用している。レコードだ。民謡、浄瑠璃、盆踊など。

「先に述べたとおり、音楽取調掛、東京音楽学校の目的は、洋楽と邦楽を研究、融合し日本独自の近代音楽をつくること。1907年に邦楽調査掛という部署ができて、継承者がなく消えかけている邦楽を保存する、その事業の一環として蓄音機での吹き込みを行っていました。純粹に調査研究のためですね」  
時代は進み、その理念は徐々に結実し始める。新しい音楽、その第一の到達点に位置付けられるのが、東

京音楽学校を卒業し、大正期から作曲家として活躍した山田耕筰であろう。「赤とんぼ」「この道」「ペチカ」といった今も歌い継がれる童謡、歌曲から合唱曲、ピアノ曲、交響楽、オペラ、はては社歌や自治体歌、校歌まで、その作品は幅広く数多い。

「山田は、当初は純粹に西洋的な曲を書いています。ある時からはやはり思うところがあったのか、東洋的な要素を加えるようになっていきます。こうした作曲家が登場することで、音楽取調掛からの目標は徐々に達成されていったということになるでしょうね」

当然、楽譜も多数出版されているが、藝大図書館には貴重な自筆譜がいくつも收藏されている。鉛筆書きの柔らかな筆致のもの、端正に清書されたペン書きのもの。譜面の末尾には、風のように躍る署名が。いくつものメロディーが、靜謐な図書館に息づく。

学校に歴史あり、図書館にもまた歴史あり。日本の美術、音楽の黎明期に生まれた東京藝術大学所蔵の稀少図書は、学内のみならず、学外の希望者にも閲覧可能とのことである。

※要登録手続き・一部史料は非公開



# 身体で感じ取る！ 図書館の未来、ここにあり。

データ化が進み、スマホで情報が手に入る今、図書館ってオイシイの？  
図書館情報学の専門家である桂英史教授に聞きました。

文=藤原えりみ

東京藝術大学附属図書館が大変身した。かつては、蔵書の大半を閉架書庫に収める閉架式図書館だった。利用者は資料請求番号を調べて、図書館員に資料を閉架書庫から出してもらう。ところが今回のリニューアルで閉架式重視の図書館生まれ変わった。利用者は書庫に入って自由に閲覧することができるよう。もちろん稀観本などの重要資料は閉架書庫に収蔵されているものの、開架率は所蔵資料の約50%。その数、なんと18万点！ かつての開架率はたった19%だったのだから、「大変身！」なのだ。

新生藝大図書館の特徴について、大学院映像研究科教授でメディア論および図書館情報学の専門家でもある、桂英史先生に話を聞いた。「ずばり開架式の導入ですね。開架率の高さですが、管理が大変だから、専門誌をこれだけそろえて合本で開架にしている大学図書館はそうそうないんですよ。それを思うと、開き直ったのか勇氣があるのかよくわかりませんが、思い切ったことをしたなあ（笑）。でも学生にとっては利便性が格段に向上したわけで結果オーライ」

### いざ雑誌の開架書庫探索へ

そこで桂先生とともに書庫探索に出発。新館の書庫は主に鋼鉄の支柱と鉄板の床でできた積層式書架で、1層分はほぼ人が手を伸ばせば届く高さ。階段で1層目と2層目を行き来できる。こころ階にある雑誌は戦後刊行号



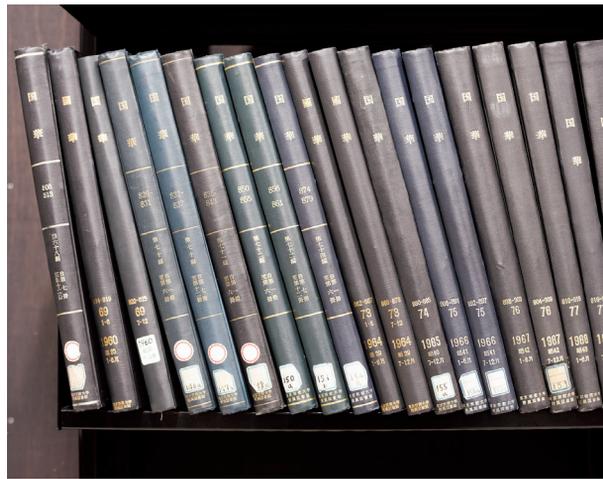
『大和文華』第1号。偶然手に取ったものからインスピレーションを受けることも。

で、戦前のものは地下の閉架書庫にある。「パソコンで検索して必要なページをコピーするだけでは、取りこぼしてしまう体験があるんですよ。雑誌同士の並びの縦横の関係、同時代性や相違性、雑誌そのもののつくりや編集方針の変遷。あちこち手を伸ばすことでそれらを実感できる。たとえば、『芸術新潮』

と『美術手帖』。同時代の雑誌なのに扱っている作品傾向が違ったりかね。つまり、情報＋α体験」と言いつつ、美術雑誌『みづる』（1905年創刊）の1952年1月号を手取る。「おお、セザンヌ特集。すごいね。アトリエがあった『ジャス・ド・ブッフアン』のカラー図版折り込み付き。活版印刷だよ」

東京美術学校の初代校長・岡倉天心が尽力した日本・東洋古美術雑誌で、現在も刊行されている『国華』（1889年創刊）も。「1960年の号だね。『絵巻における鎌倉派』だよ。シブいなあ。『国華』は今も昔も変わってないねえ（笑）。お次は奈良の大和文華館の館報『大和文華』の第1号（1951年刊）。館報ながら箱入りで表紙はクロス装。金の摺箔も使われている豪華なつくり。「この表紙はいいねえ。今も続いているけど、平成10年の号は……あれ？ ソフトカバーで少し安っぽくなったかも。資金不足かな（笑）」

「なんかまた面白いものがあるぞ」とささやく桂先生。手にしたのは『ラジオ歌謡研究』（日本ラジオ歌謡研究会刊 2007年）。「確かNHK放送文化研究所の人たちが関わ



『国華』は、明治時代から現在も刊行が続く日本最古の美術研究誌。開架で見られるのは戦後刊行の号だ。

っているのではなかったかな。これは2015年の号ですね。『国民歌謡・ラジオ歌謡をつかった秋田県出身の作曲家について』。コアなテーマと思うでしょ(笑)。でもね、明治以降、秋田県で歌謡と標準語の研究と実験的教育が行われていたんですよ。そうそう。東京音楽学校の初代校長・伊澤修二は、言文一致運動の一環で、歌謡と標準語の研究をしていた人です。近代国家として、唱歌や童謡を通じて全国に標準語を浸透させていく。美術以上に、音楽教育は明治政府の国家政策と結び

ついているんですね。音校を卒業した滝廉太郎も歌の作曲家としてデビューさせているわけで、あれも国策ですよ」

「あれこれ手に取つてると、もうキリがないねえ(笑)。まさにとめどなく「プラタモリ」状態。桂先生、いつまでも探索し続けそうなほど楽しそうなのだ。」

### 図書館は視覚化のプラットフォーム

ところが「未来の図書館はどうあるべきでしょう?」という質問を投げかけると、「難しいですね……」と眉間に縦皺。

「印刷は英語ではパブリケーション、つまり公共化ですよ。グーテンベルクの印刷術発明以降、情報の公共化は一挙に進みました。それから約500年後、インターネットの出現が公共性を伝えるメディアを物質からデジタルへと変えた。図書館から物理的な『棚』が消えるかもしれないという懸念があります」  
確かに現在では印刷物の刊行は減少傾向にある。科学雑誌の多くはPDF化され、雑誌や新聞も印刷物とウェブメディアの両輪で営業の安定化を図る。

「でもね、図書館の『棚の論理』、つまり『どの資料をどう並べ、どのように検索可能にするか』は、『資料の縦横の並びの関係性』による情報の秩序化でもあって、『棚』は情報体のシンボルなんです。例えば食器棚ひとつとっても、ある家庭内のある秩序がうかがえる。だから人は棚がつくる秩序に何かしら視覚的な魅力を感じるわけです。デジタル化によって物理的には見えない情報が増えていく時代だからこそ、図書館は情報の視覚化、つまり『棚の秩序』の形成を通して時代を表象すべきなのです」

その一方で、ものではない現代美術作品や最先端技術によるメディアアートが増えている現在、図書館と美術館のあり方も変わっていくのではないかと指摘する。  
「現代美術では、アーティストの行為や制作プロセスに焦点を当てた作品が増えてきています。つまり、ものとしての作品は残らない。作品の唯一の拠り所は写真やテキスト、映像などの記録資料なんです。こうした記録資料が美術館コレクションの対象となりつつあるのなら、図書館に収蔵される資料とさ



## 桂 英史 (かつら・えいし)

1959年長崎県生まれ。映像研究科教授。2019年4月より東京藝術大学附属図書館長に就任予定。専門はメディア理論、図書館情報学。せんだいメディアテーク(仙台市)ほか公共文化施設のプランニングに携わる。著書に『図書館建築の図像学』(INAX)、『インタラクティブ・マインド』(NTT出版)、近刊に『表現のエチカ(仮題)』(青弓社)がある。

ほど変わらなくなる。それとは逆に図書館の収蔵品でも、ごく薄い紙製の冊子のように非常に神経質に扱わなければならないものがある。そうした資料は厳密に温度湿度管理のできる美術館で保管するほうがいい、という考え方が生まれる可能性がありますね。今後は美術館と図書館のコレクション内容のクロスオーバー現象が起きるかもしれません」

そして、堅牢性の低い身近な素材による学生のインスタレーション作品や、デバイスやソフトの絶え間ない更新のために将来の再現性が危ぶまれるメディアアート作品に関しては、**もの**でなく**デジタルスコア**や**絵コン**

テ、仕様書や指示書を保管すればよく、美術作品であっても、バレエの振り付けや楽譜、戯曲のように再現が可能な記録方式を通して確実に後世に伝えるべきだと提案する。

さらに図書館についても、ただ資料を**渉猟**する場だけではなく、創造的な活動に対応可能なスタジオ的な機能を併せ持つようになってほしいと語る。

「図書館は図書資料やレコードなどの音源を保存し公開するだけではなく、製本機やレーザーカッター、3Dプリンタを活用して、利用者が何かをつくって公開し、情報発信していくプラットフォームになり得ると予想しているんですね。だから学生たちには、アトリエにこもってインターネットでググるのではなく、図書館に足を運んで、情報媒体の質感や情報の確からしさを伝えてきた**もの**のポリウム感を身体を通じて感じ取ってほしい。きつと新しい発見につながるはずですよ」

おおっ。図書館の未来が見えてきたではないか。桂先生の眉間の縦皺にはこのような深い洞察が彫り込まれていたのだ。藝大附属図書館の今後の活動に注目である。



国際芸術リソースセンター 撮影＝野田東徳(雁光舎)

藝大の図書館は1949年、東京藝術大学発足時に、東京美術学校文庫と東京音楽学校図書課の蔵書を統合して開館。美術書や音楽書などの図書以外に、画集や楽譜はもちろん、CD、LP、LD、ビデオ、DVDなどの音像や映像資料も豊富に所蔵。2018年9月、東京藝術大学国際芸術リソースセンター(IRCA)の一部としてリニューアルオープン。

### 東京藝術大学附属図書館 上野本館

東京都台東区上野公園12-8 東京藝術大学上野キャンパス内  
☎ 050-5525-2428 (資料サービス係)  
開館時間：通常 9:00～20:00 だが日によって異なるためウェブサイトの開館カレンダーを参照 <http://www.lib.geidai.ac.jp/>

「学生にすすめたい」

「人生を変えた」

先生にきく

# 私の一冊

ジャンル不問、マンガも歓迎。

さまざまな科の教授・准教授に

無理言って一冊挙げてもらいました。

お勉強というより、先生のことかわかるかも。

構成=中村志保[NS]、藤原えりみ[FE]、藤崎圭一郎[FK]、小林沙友里[KS]

イラスト=久野未結

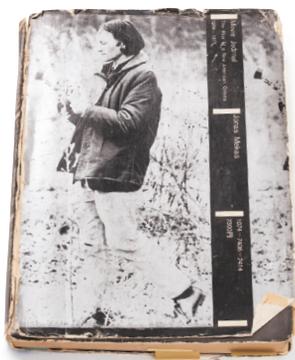




## 諏訪敦彦

映像研究科教授／映画

## 新しい映画が生まれる匂い



## 『メカスの映画日記』 ジオナス・メカス 著

飯村昭子 訳

フィルムアート社 1974年



広島出身の僕は、映画館で上映されるような作品しか知らず、実験映画、ましてやジオナス・メカスなんて聞いたこともありませんでした。

本著は、主に1960年代、メカスが新聞に連載した映画に関する記事をまとめたもの。16mmカメラを監督が一人手にするカバー写真も象徴的ですが、ピンボケやブレ、露出過不足でさえ新しい映画にとってはポキャブラリーの一部だ、という言葉には痺れました。大学入学で上京する前に初めてこの本を読み、一人で行く映画の存在を知ったのです。当時の日本では、実験映画という

と小さなコミュニティの中のものだったので、劇映画の中で実験を試みるほうが面白いだろうと思いました。メカスは劇映画も実験映画も分け隔てなく同じ文脈の中で論じ、広い視野で映画を見つめた人です。

リトアニア出身のメカスは亡命した米国で映画を撮り始め、一つの時代の潮流をつくり、中心人物となりました。今まさに何が生まれる気配を、映画作家たちの熱量や躍動を、文から鮮烈に感じます。映画や写真を見るだけでは伝わらないことがある。読む面白さとは、ここにありとあるのです。[NS]



## 原真一

美術学部教授／彫刻

## ヤケドするほど熱い本

「なんだこれ!?」。ただ落書きのよ  
うなものがあるばかり。大学時代の  
カラージュ作品を集めた大竹伸朗  
さん初の画集と出合った時の印象で  
す。藝大で僕が習ってきた美術のア  
カデミックな「お勉強」の範疇を優  
に超えていて、まさに衝撃的。なん  
の縁かその後ご本人にお会いするこ  
とになり、さらに打撃を喰らいます。  
芸術に対する馬鹿でかい愛情が裏返  
り、むしろ怒りとなって表れていて、  
「ああ、あの本をつくった人だ」と妙  
に納得。その熱量にヤケドした僕は、  
いかに自分が藝大というぬるま湯に  
浸かってきたかを痛感したのです。

僕たちが取り組む彫刻は、時代に  
取り残されたメディアかもしれないま  
せん。でも、泥臭くって、自分と向き  
合うにはもってこいです。せっかく  
あえて選んで藝大に入ったのなら、  
手強い素材を前に、世の中の流れに  
逆行してみてもよいのでは？

上手下手を超えて、やはり情熱に  
勝るものはありません。僕もあの衝  
撃がなかったら、きっと、もつとオー  
ソドックスな作品にとどまろうとし  
ていたでしょう。今でも大竹さんに、  
「よくやったな」と言ってもらえる  
ような作品をつくりたい。まだあの  
時のヤケドは癒えぬままです。[NS]



## 『倫敦／香港 1980』 大竹伸朗

用美社 1986年



# 毛利嘉孝

国際芸術創造研究科教授 / アートプロデューサー

## 根茎的ネットワーク世界とポップな文体の衝撃



### 『千のプラトール』

資本主義と分裂症(上中下)』

ジル・ドゥルーズ、

フェリックス・ガタリ 著

宇野邦一 ほか 訳

河出書房新社 1994年

河出文庫 2010年

「リゾーム」は『千のプラトール』の序文ですが、最初に翻訳されたのは雑誌『エビステマー』の臨時増刊号(1977年)。とにかく哲学書としては破格のポップな文体が衝撃的でした。主幹があつてきちんと枝分かれしていく論理的階層のツリー状構造とは違い、根茎を意味するリゾームは、相互参照と複雑な絡み合いから思いもよらないつながりが生まれる状態を指します。上下関係もヒエラルキーもない複雑なネットワーク。それから二元論の超克ですね。「人間と機械」「人間と自然」「主体と客体」という対立項でなく、「戦争機械」

とか「文学機械」とかすべてを「機械状」のものともみなす。

当時、京都大学の学部一年生で、すごく背伸びをして読んでいたわけですが、助手であった浅田彰さんが自治会主催の読書会で牽引してくれました。緊張しましたが、かなり鍛えられました。おそらく内容的なことはあまりよくわかっていかなかったけれど、本を媒介として人のつながりができた。藝大にもそういうネットワークがあると面白いと思います。ドゥルーズ&ガタリは今リバイブルームなので手にとってもえればうれしいですね。[FE]

定住しない遊牧民的(ノマド的)な生き方(スキゾ)を称揚するジル・ドゥルーズの哲学をベースとする思想書で、僕が衝撃を受けたジャック・ラカンに関するテキストも収録されています。「構築的な世界をぶっ壊し、流動化させよ」というメッセージは強烈で、内容理解より先に感性が触発される。日本の思想風景を一変させた本です。

僕の専門は精神病理学で芸術は門外漢なので、メディア特論を古川聖教授と共同担当するまでは、芸術とは「何も言わせない力をもつもの」だと思っていました。でも現代美術に

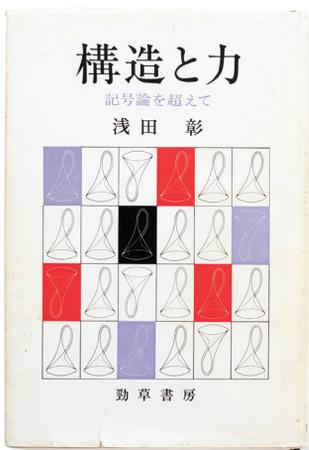
は言語が必須なんです。言葉なしには感じる事ができない。言葉が介在して初めて凄さが感じられる。昨年、ピカソの作品を初めて凄いと実感しました。作品の向こうに何かあるとか、何を意味しているのかとか、すべてはねつけて屹立さつりつしている。言語の空白地帯。でも僕がドゥルーズなどの現代思想を勉強していなかったら、この感覚は立ち上がってこなかったと思います。言語経験から起動する感覚がある。だから、今の時代に芸術に関わる学生には思想とか哲学に触れてほしい。その入門書としておすすめします。[FE]



# 内海健

保健管理センター長・教授

若人よ、知的に野蛮であれ



### 『構造と力』

記号論を超えて』

浅田彰

勁草書房 1983年



三上亮

美術学部准教授／陶芸

# 陶芸に見る豊かな芸術性

富本 憲吉

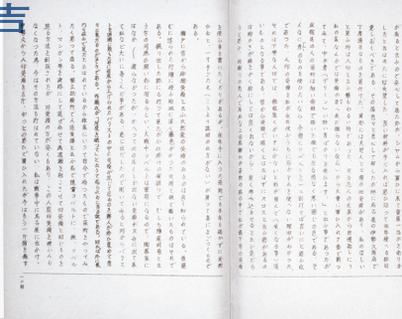
## わが陶器造り

京都府立芸術大学  
芸術学研究所フェロー 名譽  
森野 彰人、編輯 引佐 剛  
『日本経済新聞』文化情報部（人間国宝）に認定された、  
富本憲吉が陶器作家と教育者としての軌跡を、情熱から陶芸、  
陶芸家としての歩みと、陶器の歴史までを、  
それらの『わが陶器造り』である。未完ではあるが、  
読者 50 冊も経てなお息絶せぬ『陶器造り』である。  
本書は陶器造りに関するあらゆること、  
富本の思いが込められている。

### 『富本憲吉 わが陶器造り』

森野彰人、  
前崎信也 編著

里文出版 2019年



1886年生まれの富本憲吉は、東京美術学校図案科を卒業し、人間国宝にもなった陶芸家です。学生の頃、富本憲吉の著作全集を買ったのですが、この本はその中の一編である技法書を復刻したものです。今読み返してみると、僕は非常に影響を受けているなと感じます。釉のテストや窯のつくり方をはじめ、書かれています。この多くを実践していますから。陶芸の美しさと芸術のそれは等しくあるべきだと説き、「私はろくろがヘタだ」なんてことを平気で書いていたのもまた一興。いわば、技術だけではないと教えてくれる技術書

で、端々から富本憲吉が近代的精神の持ち主であったことがよくわかります。さらに、陶芸だけでなく、絵画はもちろん、皮工芸や刺繍、木版画、詩作など、面白いと思うことなんでもやってしまおう。そんなところが藝大生とも似ているような気がします。アートの工芸が接近し、また、アートが工芸にヒントを求める。今はそんな時代にあります。富本憲吉はその先駆者であり、豊かな芸術性を生きる力にしようと思いました。陶芸を志す人にはぜひひこうあってほしいと思うのです。[NS]



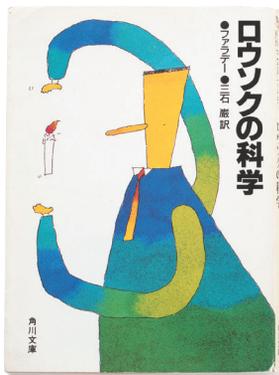
中山英之

美術学部准教授／建築

## 意味は形が見える!?

多浪してようやく藝大に入った僕ですが、それもそのはず、まったく勉強をしない高校生だったからです。そんな僕の転機となったのは、ギャラリーで偶然見た建築ドローイングの展示。これで建物が立つのか！と、衝撃を受けました。心機一転、勉強するぞと思ったからさあ大変。手ほどきに児童向けの本からスタートしたところ、この名著に出合います。一本のロウソクで、燃焼という一連の物理現象が鮮やかなまでに説明されています。化学反応そのものが合理的な形のプロダクトとなり、それ以外に必要なものをいっさい介さ

ずに存在している。意味は形へ直結するものがごく身近にあることに驚きました。不必要なものがない、というのは建築においても重要な考え方。建物を支えるために必要な要素だけで空間をつくり、さまざまな働きを体現する。まさにロウソクを手本とするような建築が理想的です。ちなみに、作者のファラデーは苦勞人で、20歳を過ぎてから、科学者の道を歩み始めます。立派な友人たちから周回遅れの僕は途方に暮れることもありましたが、何者かになろうとすることにタイムリミットはない、といつも励まされるのです。[NS]



ロウソクの科学  
ファラデー著 石原 訳  
角川文庫

### 『ロウソクの科学』 ファラデー 著

三石巖 訳

角川文庫 1962年



**木津文哉**  
美術学部教授／美術教育

## フランスの巨匠の 線と色彩の魅力



『Arzach』  
メビウス  
Les Humanoïdes  
Associés 2011年  
※初版 1976年

フランスには独自のマンガ文化があつて、マンガのことをバンドデシネ(BD)と呼びます。メビウスはその第一人者で、大友克洋や宮崎駿にも強い影響を与えています。僕がメビウスを知ったのは『スターログ』というSF雑誌。当時、油画専攻の学生でアニメーション研究会に入つていて、部長は村上隆で、伊藤有幸(現・映像研究科教授)もいましたね。メビウスは線が衝撃的でした。細かい線の集積で描くハッチングという技法を使っているのですが、それは当時の日本のマンガにはほとんどないものでした。ダ・ヴィンチやミ



ケランジェロのデッサンに通じる妙な密度の濃さがある。水木しげるはジャンルとかの背景を点描・線描でびっしりと描き込んでいますが、そこにシンプルな線のモヒョっとしたねずみ男が現れる。メビウスは人も背景も稠密に描き込んでいて、日本的な情念とは明らかに違う情念が生じている。彼の色彩感覚にも魅了されました。原色の組み合わせはありません。隣の色との組み合わせによって美しさを感じさせる色彩設計。『Arzach』はセリフなしに話が進む作品です。まずはその線と色を味わってもらいたいですね。[FK]



**露木雅彌**  
音楽学部准教授／邦楽

## 古典と現代をつないだ作品

もう30年以上も前、20歳になってすぐの頃です。演出家・蜷川幸雄氏の舞台『NINAGAWA・マクベス』に出演することになりました。ところが台本を見ると、安土・桃山時代の設定ながら、マクベスなどの固有名詞はそのまま登場するので目が点になりました。それもそのはず、原作を一字一句変えずにセリフが成り立っているのです。稽古が進むうちさらに驚いたのは、そこにまったく違和感がないことでした。これには、人間の本性に関わるテーマがあれば、時代や国を超えて人の胸に響くのだと気づかされました。

古典芸能の一家に生まれた私は、それまで真つ当な古典しか知りません。が、この舞台に刺激を受け、新しい踊りをつくっていかうと決意したのです。以来、シェイクスピアの悲劇『リア王』や、ギリシャ悲劇の大作『グリークス』を和風アレンジした舞台などで、振付や演出に挑戦してきました。ただ、きちんと古典を学ばないと新しいことはできません。その逆も然り、古典を演じるには新しいことを知らねば発想が貧弱になりがちです。そのような意味でも『マクベス』は、古典と現代を結んでくれた思い出深い作品です。[NS]

『マクベス』  
ウィリアム・  
シェイクスピア 著  
小田島雄志 訳  
白水Uブックス 1983年



# 齋藤芽生

美術学部准教授／油画技法・材料

## 色彩をもつ詩

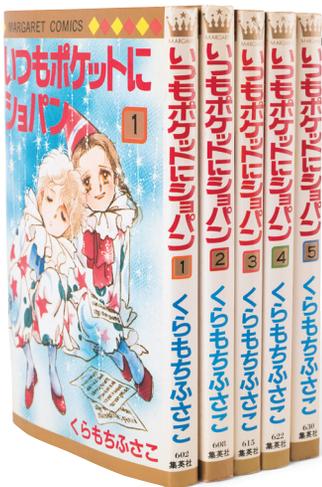


## 『思ひ出 抒情小曲集 柳河版』 北原白秋 立花和雄 1967年



明治期の日本語の美しさに惹かれ、近代詩に興味をもつようになったのは15歳の頃です。古本屋で偶然見つけた詩集からは、北原白秋が幼年時代を過ごした福岡県柳川の風土と、南蛮文化のエキゾチックな空気が薫り立つようでした。装幀や文字の洒落たデザインにも感動し、この時、本をもつという喜びを知ったのです。それまで詩に対して抱いていた印象は、「感受性を開きなさい」と促されるような圧迫を感じるものでした。しかし、白秋の詩には色彩が見えた。私は幼い頃から、文字や数字を色で記憶する質だったらしいのですが、その共感覚が一気に開くようでした。

「金の入目に繻子の黒」という表現など、そのまま絵画として成り立ちそうです。言葉は、単に説明の機能ではなく、イメージを立ち上げさせる道具としてあるのだとわかりました。そして、当時、この詩集に着想を得て絵を描き始めたことが現在の出発点にあるようにも思います。焼き直しのようなものにあふれた今だからこそ、自分の言葉というものを模索した時代の、芳醇な詩の世界に触れてみてほしいです。ただの言葉として言葉を見るのではなく、また、絵の中だけで絵を学ぶのではなく、新たな世界を呼び醒ますものとして。[NS]



# 植田一穂

美術学部教授／日本画

## 表現を模索する若者たちへ

少女マンガ好きというわけでは決まてないのですが、その昔、この作品を目当てに『別冊マーガレット』を毎月買っていました（むさ苦しい身なりの男にとっては勇気のいる話）。ピアノリストを目指す高校生が才能を覚醒させていく物語が、音楽と美術の違いはあれど、本格的に絵を始めた自分とリンクしたのでしよう。浪人時代のバイブルです。厳しくも優しい先生が登場するのですが、音楽を絵に喩えて生徒を諭すシーンで、教えることは「パネルに紙をはる技法でしかない」と言います。そこから先は、自分で絵の具

を選び色をつけていかなければなりません。なるほど、僕も音楽が聞こえてくるような絵が描けたら、と思います。また、高名なピアノリストである主人公の母親は、娘にピアノ以外のことも積極的にやらせます。料理だって表現の幅を広げます。さまざまな経験が表現を豊かにするのだと。才能というのは望む人みなに与えられるわけではないと承知しているものですが、身につまされます。40年近く前の作品ですが、表現とは何かと葛藤する若者の姿が自分と重なり、勇気を与えることでしょう。僕の一押しマンガです。[NS]

## 『いつもポケットに シヨパン』 くらもちぶさこ

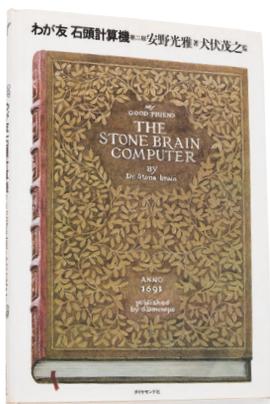
集英社 1981年



## 丸井淳史

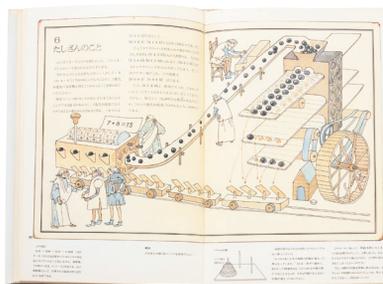
音楽学部准教授 / 音楽環境創造

## 絵で魅せるロジック



## 『わが友石頭計算機』 安野光雅

ダイヤモンド社 1973年



画家であり作家、そして美術の先生でもある安野光雅さんは、数学や科学をはじめ、さまざまな世界を楽しみ絵とともに教えてくれる数々の名著を世に送り出してきた方です。週末になると家族で図書館へ——そんな少年時代を過ごしていた僕は、なかでも「騙し絵」の本に夢中。中学生になってすぐの頃、タイトルも面白いこの一冊に出合うのは必然でした。本書では「ピタゴラ装置」のようなワクワクする仕掛けの絵を使って二進数を解説しています。当時としてはめずらしく家にコンピューターがあり、ちやうどプログラミン

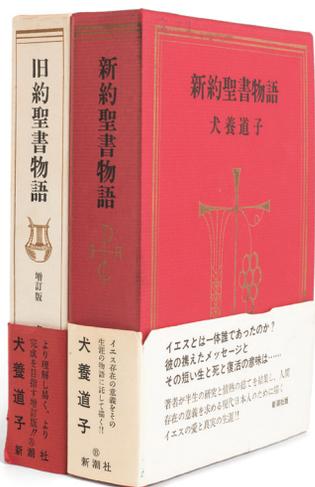
グを始めた僕は、デジタルの基にあるものが実はアナログの世界に通じている！と目から鱗でした。今、安野さんの本が媒介となり、幼い頃から親しんできた楽器や音楽と、コンピュータの世界をつなげてくれているような気もするのです。どの分野においても論理的であることは大切なことです。プログラミングも然り、コンピュータが誤解せぬよう言語を書かなければなりません。「誰にでも伝わる」という論理的な思考をこの本は養ってくれることでしょう（絵を眺めるだけでも楽しいですよ）[NS]



## 永井和子

音楽学部教授 / 声楽・オペラ

## 人間の物語としての聖書



この本に出合ったのは声楽家としてデビューした頃の頃だったと思います。バッハのオラトリオやオペラにしても西洋音楽の世界を理解するには聖書を読まないといけないと何度か試みたのですが、いつも途中で投げ出していました。この本は、犬養道子さんが聖書を小説風にわかりやすく仕立て直していて、読みはじめたら夢中になりました。旧約から読みましたが、強く心に残っているのは『新約聖書物語』のほうです。新約では犬養さんがイエスを一人の人間として描いています。読み終えて、イエスは私たちと同じように苦

しみや喜びを感じる、「人間」なんだと、感動したのをよく覚えています。歌曲とは、作曲家や詩人が何かの出来事に心を震わせて生まれてきたもの。楽譜を目の前にした時、これを美しく良い声で歌いたいと思うわけですが、それを超えて、そこに魂を入れていくのが私たち再現芸術家の役割です。ただ「この曲きれいな」と言われるような表面的な美しさだけでなく、痛みや悲しみや喜びといった人の心に深く根ざしたものを究めていきたい。そう常々抱いている思いがこの本で得た感動とつながっているのだと思います。[FK]

## 『旧約聖書物語』 『新約聖書物語』 犬養道子

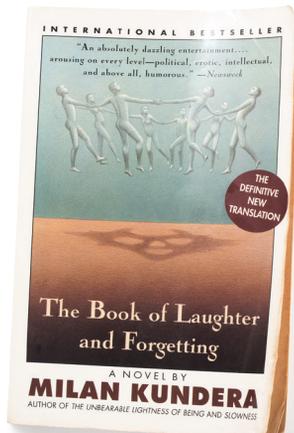
新潮社 1969年 1976年



福中冬子

音楽学部教授／楽理

記憶すること、  
そして書くこと



# 『The Book of Laughter and Forgetting』 Milan Kundera 著 Aaron Asher 訳

Perennial 1996年

※邦訳『笑いと忘却の書』集英社 1992年

2001年、ニューヨークで博士課程に在籍していた私は、音楽学の研究は自己満足でしかないのでは？などと思案し、社会での自分の立ち位置を性なるようになっていました。そんなある日、鉄道で郊外へ旅に出たのです。道中のお供にこの本を持って。

クンデラはチェコスロヴァキアに生まれ、1975年フランスへ亡命した作家です。本著は「記憶と忘却」をテーマにした短編集で、フィクションとノンフィクションが入り混じり、精緻なモザイクのように編まれています。背景にある母国の社会主

義体制や変革運動など、複雑な歴史も特筆すべきことですが、人間性が失われつつある現代において、それを食い止めるのが記憶であり、記述は重要な手段だ、と書かれています。「The Struggle of man against power is the struggle of memory against forget」という美しい言葉も象徴的で、記述や創作にも通じる道標のようです。

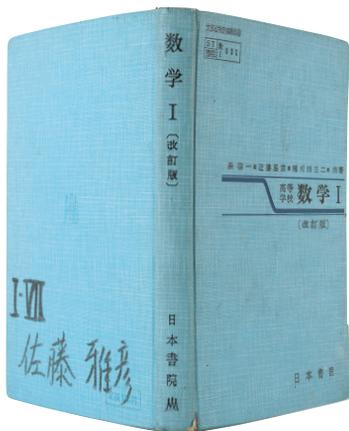
私は鉄道に揺られながら、「書く」という作業があらためて腑に落ち、自分の研究は微々たる一端にすぎないかもしれないが、それでも「つなぐのだ」と思い直したのです。[NS]



佐藤雅彦

映像研究科教授／メディア映像

美しい世界への入り口



『数学I』  
日本書院 1969年

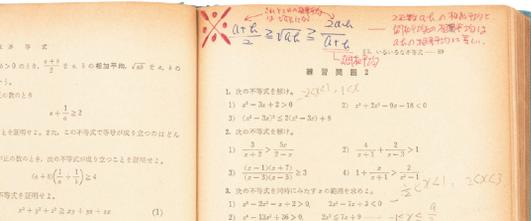
それまではなんとなく生きてたんですよ。伊豆ののどかな漁村で生まれ育って、生活も学校の授業も、なんとなくできていて、気持ちよかったです。ところがこの教科書を手にした途端、よくわかんなくなっちゃったんです。方程式を経て、指数関数・対数関数が出てきたあたりで、「ああ、世の中って、自分が本気でやってちゃんと理解しないとイケないんだ」と。そして、きちんと理解すると、こんなにきれいでかつこい

い世界があるんだということがわかりました。それまでぼんやりとしていた世界のイメージがすごく明快に

見えて、真の美しさを追求できる喜びを知ったわけです。華は数IIの微分積分、一番好きですね。

藝大の学生の中には、黄金比みたいなものの美しさにアルゴリズムがあるんじゃないかと研究している人がいたりして、数学的思考が背景にあるという人も少なくありません。僕の「ピタゴラ装置」にしても、影にきちんとしたメカニズムがないと物理現象として動きませんね。

数学本では『やわらかな思考を育てる数学問題集』(岩波現代文庫)がおすすめ。自主ゼミで使っていたロシアの本が復刻されました。[KS]





## 小鍛冶邦隆

音楽学部教授／作曲

## 音楽の背後にある知の構造



### 『言葉と物』

人文科学の考古学

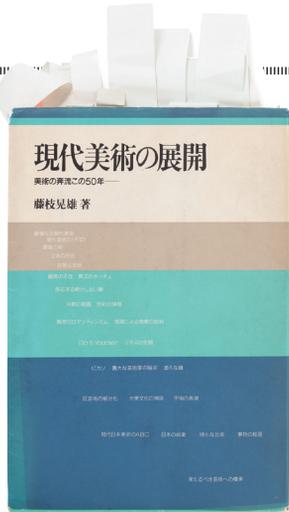
ミシェル・フーコー 著

渡辺一民、佐々木明訳

新潮社 1974年

読んだのは大学2年の頃。当時日本では構造主義が思想的なブームで、文化人類学者クロード・レヴィ・ストロースの『野生の思考』と、各時代の物事の変遷を組織するもの、あるいは時代によって編成し直していくものとは何か、という観点で書かれたミシェル・フーコーの『言葉と物』が非常に印象深かった。音楽芸術は人間的な表現だから普遍性をもつと考えていましたが、「音楽は表現」という意味で普遍的なのではなく、知の構造として普遍性をもつのではないか」ということを学びました。それこそ絶大なインパクトでしたね。

「知」というと抽象的なものと思われがちですが、今日ではコンピュータ・ネットワーク的な観点でとらえればよいと思います。音楽は音と音のネットワーク。音を関連づける行為そのものが、感情や精神ではなく知の領域にある。演奏家は演奏しながら楽器とともに思考する。つまり楽器と人が一種の知的構造体になるわけです。作曲はそのきつかけとなるもの。こうした知の構造は作曲家や演奏家だけではなく、聴衆とも共有できるものだと思います。音楽も同様に、どこかでフーコーに行きつくのではないかなあ(笑)。「E」



## 林卓行

美術学部准教授／芸術学

## 作品に即して語る無骨な言葉の力

高校3年生の時、通っていた予備校の講師を務めていた芸術学科の先輩の上田高弘さん(現・立命館大学教授)からすすめられました。読んだのは大学入学後ですが、内容よりも、美術をめぐる議論にはこういう手法があるのだという発見が大きかった。で、その手法ですが、とにかく文章が読みにくい。難しいというのではなくて悪文(笑)。それまで美術評論とは流麗な文章だと思っていたので、強面で何を言っているのかわからないのにやたら偉そうな文体が新鮮でした。さらに読み込んでみて、「作品に即してきちんと書こうとす

るからこうなるのだ」と気づきました。美術作品でも文章でも厳密につくろうとしたら、なんらかのフォーム(形式)が生じます。その形式は一見するとゴツゴツしていて不格好で無骨かもしれない。でも、滑らかにさらっと流れていく文章では決してつかむことのできないものがある。そういう愚直さを学生に知ってほしい。スマートだけが能ではないよと。今なら一昨年刊行された『モダニズム以後の芸術 藤枝晃雄批評選集』(東京書籍)をすすめるべきですが、自分を変えたという意味ではやはりこれですね。「E」

### 『現代美術の展開』

— 美術の奔流この50年 —

藤枝晃雄 著

美術出版社 1986年



## 山村浩二

映像研究科教授／アニメーション

### 短くて永い短編集



『伝奇集』  
ホルヘ・ルイス・  
ボルヘス著  
篠田一士訳  
集英社 1984年

この世に存在するすべての本、そして、この先書かれるであろう全書物が蔵書された奇妙な図書館——そんな「バベルの図書館」(本書収録作)という話に着想を得て、『バベルの本』という短編アニメーションを制作したことがあります。

『伝奇集』は、1944年アルゼンチンで刊行された短編集。大学の頃、偶然手にしたのを機に、どっぷりとボルヘス作品にハマることになりました。装飾を削ぎ落とした文体ながら、奥深い引用やユーモアを孕みま

す。壮大な知のパロディーと言うべきか、さもあろうな名の事典から言葉を引き取って、実は架空の事柄であったりと、どこまでが創作なのか、およそ捉えどころがありません。生涯、短編に専心したボルヘスですが、限られた幅でイメージをどれだけ凝縮できるかと考える時、それは短編アニメーションにも通じます。創作とは、感じたことをただ羅列するのではなく、あるテクニクを基にもう一度提示し直すこと。引用や設定、幻想性など、ボルヘスの作品にはヒントとなる技法が随所に眠っています。一瞬の中に宇宙を見る。そんな彼の夢を僕も追ってみたい、いつも願っているのです。[NS]

2006年まで14年ほどをドイツで過ごしました。その頃に何度も繰り返し読んだのが犬養道子さんの本です。犬養さんもヨーロッパに長く住んだ方なので、特に親しみを覚えたのかもしれません。

正直に言うと、数ある著書の中から一冊を選ぶのが非常に難しいのです。自伝的なものもあり、雑学的な内容のものもあり、晩年の難民問題に関わる活動について書かれた本もあります。ただ、すべてに共通する魅力は、身近な日常のリアリティを語りながら、そこに彼女の信条というべきか、固く信じているものが

揺るぎなく描かれていることです。

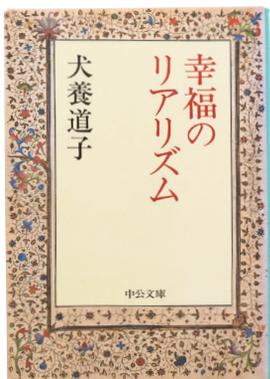
私がドイツへ渡ったのも、オルガンの練習をする場が日本では十分ではなかったからです。パイプオルガンは教会で発達した楽器なので、やはり本場で体験することが一番でした。オルガン科の学生の多くも卒業後に留学をすることになると思いますが、困難に直面することもあろうでしょう。その時には、日本のことも海外のことも熟知した犬養さんの言葉が身に沁みるはずですよ。悩んだ末、見逃しがちな身の回りにあるいくつかの小さな幸福が掬い上げられた、美しい本書を推薦します。[NS]



## 廣江理枝

音楽学部教授／オルガン

### 一片の幸福を見つけて



『幸福のリアリズム』  
犬養道子  
中公文庫 1984年



**松下計**  
美術学部教授／デザイン

## 根源的な造形能力が 覚醒する

### 『李朝の民画』

志和池昭一郎、

亀倉雄策編

編集顧問・趙子庸、

水尾比呂志、李馬煥

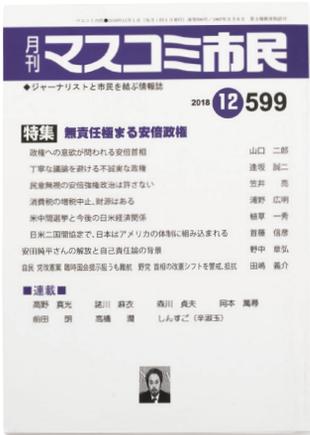
講談社 1982年

藝大でデザインを学んでいた頃、グラフィックデザイナーの亀倉雄策さんがつくった本だと聞いて、上下巻で10万円以上と高かったのですが、バイト代などをかき集めて買いました。朝鮮王朝時代の民俗絵画のコレクションだった亀倉さんが編集に携わり、装幀も手がけたというものです。絵の作者は不明。いってみれば宮廷画家になれなかった素人たちの絵で、いわゆる絵画の世界でよしとされている構図からはズレているものもあつたりしますが、独創的な形や構図が人間味に溢れていて実に魅力的です。コンポジションを考えると

き、美しい構図や色づかいを強く意識するのではなく、本来人間がもっているバランス感覚や可視化する力が自動的に発揮されるのが理想ではないかと思うのです。最近はその作品を説明する言葉が取り沙汰され過ぎて、形の話が置き去りにされがちですが、僕は造形そのものが伝える「意表」を大事にしたほうがいいと思っています。この画集は散歩するようにめくるだけでもインスパイアされるので、自分の中にある思いもよらない造形感覚を思い出すきっかけとして、見てもらいたいですね。[KS]



※写真は下巻



**渡邊健二**  
音楽学部教授／ピアノ

## 自由に表現できる社会を

共産圏時代のハンガリーに留学したからかな。どうしても社会のあり方が気になります。芸術は自己追求の世界。でも、社会のことを忘れちゃダメです。100年先を目指すなんて言っても、その時芸術を自由に表現できる社会がなかったらどうしますか？ 政治というと難しく考える人が多いけど、別にデモに行くことだけが政治じゃない。社会のことを知る、考える、ということが政治。自分が生きやすい社会をつくることに政治です。学生諸君にはもっと社会に目を開いてもらいたい。大手メディアが伝えるものはどうしても政

権寄りになるけど、それに対するアンチテーゼとしておすすめするのが『マスコミ市民』です。こんなことがあったのか！と驚かされることいろいろと載っています。ぜひ、複数の視点をもって社会を見られるようになってください。

その他、大人の生き方が詰まった池波正太郎の『剣客商売』(新潮文庫)、潜在意識を活用する耳の使い方(柏樹社)、武術もピアノも体の使い方には共通点があることに気づかせてくれた津本陽一『柳生兵衛助』(文春文庫)もおすすめです。

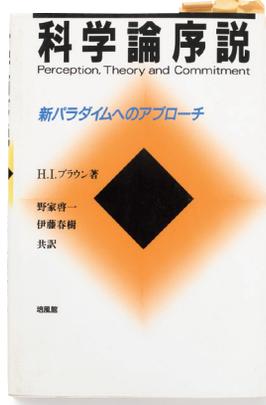
『マスコミ市民』  
マスコミ市民フォーラム  
1967年  
※購読方法  
<http://masukomi-shimin.com/perchase>



古田亮

大学美術館准教授

その絶対を疑うべし



『科学論序説』

新パラダイムへの

アプローチ

H・I・ブ라운 著

野家啓一 ほか訳

培風館 1985年

20代の頃、美術史を専門にするこ  
とは決めていましたが、方法論とし  
て何をどう組み立ててよいのかがな  
かなか見えず、この本のような科学  
論に関する書籍をさまざまの時期が  
あります。それらを紐解くうちに、  
雑駁ながらある結論にたどり着きま  
した。それは、「私はこう思うけど、  
どうですか？」と一つ引いた見方を  
することです。

「○○である。よって□□である」  
というのが科学的方法だと思ってい  
よう。ところがそれは一つの見え方  
にすぎません。完成したように見え  
たものも、別の見方をすれば新しい

ことが起きるもの。そこからどう開  
いていくのかが大切です。

これは私が美術史について何かを  
語るべきの指針にもなっています。  
展示を企画するうえでそうです。  
本人にしかわからないような展覧会  
は息苦しい。むしろ企画者の意図と  
は違う見方や、予期せぬ反応がある  
とうれしいもの。そんなことが起き  
て初めて意味があるのです。

誰かに教えられた通りにやっても  
発見はありません。学生の皆さんも  
壁にぶつかったときにはもう一度、  
自分の思い込みを疑ってみてほしい  
です。[NS]

最近大人気の「グローバル」という  
ことばは大航海時代に出来上がった  
もので、西欧の覇権を地球的規模で  
展開するという意味が込められてい  
たとか。芸術表現の分野では横文字  
やカタカナ語が氾濫していますが、  
その本来の意味が理解されているの  
かおおいに気がかりです。洋の東西  
を問わず、ことばには言霊がありま  
すから、その概念を理解したうえで  
用いられるべきです。

万葉学者の中西進氏は、古代のこ  
とばとその背景に関する圧倒的な知  
性を持った現代の碩学です。本書は、  
1999年から東海道新幹線の車

内誌に連載された随想をまとめたも  
ので、平易な文体ながら、深遠なこ  
とばの世界へ誘ってくれます。関西  
へ出張する機会が多い私ですが、車  
内でこの連載を読むことを何よりも  
楽しみにしていました。そして、そ  
の余韻をもって京都や奈良を訪ねる  
ことで、日本人の心象風景をより深  
く理解することができました。今で  
も、折に触れ拾い読みをして作品の  
源泉にしています。

軽薄なことばがあふれる現代にこ  
そ読まれるべきこの名著を、国境を  
超えて活動を行おうとする若い人た  
ちにおすすめします。



藪内佐斗司

副学長、美術研究科教授/保存修復彫刻

深遠なことばの世界と出会い直す

『日本人の忘れもの』

〈1〜3〉

中西進

ウェッジ文庫

2001〜2004年



日本人の忘れもの

日本人の忘れもの 中西進

日本人の忘れもの 中西進

日本人の忘れもの 中西進

忘れもの

中西進

ウエッジ

ウエッジ

ウエッジ

ウエッジ

ウエッジ文庫

2001〜2004年



杉本和寛  
音楽研究科教授 / 音楽文芸

わからないことに何度でも挑む



『こころ』  
夏目漱石  
ポプラ社 1971年

小学5年生の頃、読書に興味のない父親から買ってもらった中にあるのがこの本。偉人の伝記から乱歩の少年探偵団、ホームズやルパンなど、オソドックスに読書対象が展開していたところに突然現れた本格小説(?)に戸惑いつつ、次から次へと本を買ってもらえる環境ではなかった。仕方なく読み始めました。が、とにかくわからない! おぼろげに想像するしかない時代背景、旧制高校・帝大の学生たちの生活、登場人物の心理(「先生」の生き方は正義ではない気がするし)……何度読んでもモヤモヤとしたものが残

るだけの経験を10回以上繰り返し読むことに。ただそれは、何度も読むことでその世界が少しずつわかってくるという体験でもあり、自分自身の読書における成長の指標のようになっていきました。

昨今の世の中はすぐに正解を求め、わかりやすいことがよしとされませんが、研究や創作はわからないことに取り組んで、少しずつ進んでいくもの。特に体力のある若いうちに、何度でも挑戦するという経験しておくことは大事なことでないかなんていうと、年寄りの説教じみてもう少しですかね。[KS]



『なつのロケット』  
あさりよしとお  
白泉社 2001年



八谷和彦  
美術学部准教授 / 先端芸術表現  
感動こそが原動力

僕は、超小型衛星打ち上げ用のロケットを開発する「なつのロケット団」というプロジェクトの一員です。メンツにはプロジェクト名の由来となったマンガの著者をはじめ、SF作家やJAXAの技術者たちがそろい、いつかは小惑星への到達を目標にしています。「宇宙征服」という映画の中の話みたいですが、その実、人間の活動範囲を広げていくことだと本気で考えています。そんな思いを巡らすきっかけとなったのがこの一冊。小学生5人が夏休みに本物のロケットを完成させる話です。奮闘する姿に突き動かされ

ますが、特に印象的なのは「今、真上」というラストシーン。衛星の位置を算出すると、頭上遙かな空にキラッと光るものが見える。夢と感動が凝縮された素敵なおコマです。昨今「ものづくり」という言葉をよく耳にしますが、これからのプロダクトには発想がより重要になってきます。精度は機械に任せればいいのですから。感動こそが原動力。マンガのようなフィクションがきっかけでもいい。ある種の軽率さや迂闊な発想から始まっていい。それはアーティストにこそ与えられたチャンスではないでしょうか。[NS]



李美那

美術研究科准教授／  
グローバルアートプラクティス

## 美術家の生き様を伝える 予言書



### 『曹良奎画集』

美術出版社 1960年



愛甲健児先生惠存

曹良奎

1960.9.5

藝大の芸術学科でゼナンヌを学び、静岡県立美術館の学芸員となった私は、韓国籍という理由で、日・韓・中・台・香の近代美術展の韓国担当になりました。その時買ったのがこの画集。曹良奎は1950年に日本に密航、60年に北朝鮮に帰った画家です。結局99年の『東アジア／絵画の近代』展では出品できませんでしたが、10年以上たち2015年に神奈川県立近代美術館で日韓近代美術展を行うことに。そこで元『美術手帖』編集者の方から、曹のアトリ工の写真を収めたアルバムを預かります。その後、このアルバムと例の

画集、そして60年の『美術手帖』曹良奎特集の写真撮影者が同じであることに気づき、ふと画集を見ると、「愛甲健児先生」ご恵存」という曹の献辞が。『美術手帖』初代編集長・愛甲さんが帰る直前の曹を取材し、画集と特集を企画編集したことを発見したのです。「ふたたびの出会い 日韓近代美術家のまなざし——「朝鮮」で描く」展の図録には書いていませんが、美術史の一頁だった曹の生き様が心に染み込んでくるようでした。学芸員生活の中心が日韓近代美術になると思っていた私にとって、予言書ともいえるものです。



澤和樹

学長

## 体を知って自分を知る



『原初生命体としての人間』  
野口三千三  
三笠書房 1972年

藝大生の頃に受けた野口三千三先生の「野口体操」は、もっとも思い出深い授業です。脱力し、体の重さに任せてゆらゆらと揺れることから、別名、こんなにやく体操。

私たちは自分の体は固体だと思っていますよね。ところが、先生は「皮膚という柔らかな袋の中に液体が満たされ、そこに内臓や骨が浮いている」と言うのです。頑張ろう、と体を緊張させることが逆に動きを鈍らせると知り、この発想は僕がヴァイオリンを弾くうえでも役立つことになりました。演奏家はアスリートと同じく、いかに自分の体を効率よく

使うか理解する必要がありますから。「自分とは『自然の分身』」だと先生は書いています。また、自分とは何かを探検する営みを「体操」と呼んでいます。力を抜き、重力に歯向かわず、しなやかな動きを身につける。身体と意識がつながり、新しい自分を発見することは、新たな表現との出会いでもあるでしょう。

何を隠そう、僕は64年間ずっと肥満児を続けていますが、現在は演奏のために各地を駆け回るタフな日々を送っています。この本から得たアイデアが僕の身体をつくってくれている、と思わずにはいられません。[NS]

# 藝大アートプラザの野望



こ、これは！  
企画会議中にみんな  
テンションが上がっちゃった  
だけで…!!

**藝大アートプラザの野望表**

- ・猫展
- ・アートプラザラボ
- ・アート教室(教材開発)
- ・冠婚葬祭展  
(墓石 棺桶 骨つぼ)のオーダーメイド
- ・藝大住宅

小学館集英社  
プロダクション  
(ShoPro)  
島貫倫子

私、ShoProの  
アートプラザ担当者として  
企画・運営に携わっていますが  
この野望に感動しました!!

「採点や『評価』に  
慣れた  
社会の価値観を…  
A-による最適化  
の波を…!!」

「唯一性』『個性』  
でしょう  
アートってのは

「やんちゃ  
しましうよ  
日比野さん」

「採点や『評価』に  
慣れた  
社会の価値観を…  
A-による最適化  
の波を…!!」

「唯一性』『個性』  
でしょう  
アートってのは

「やんちゃ  
しましうよ  
日比野さん」

「探点や『評価』に  
慣れた  
社会の価値観を…  
A-による最適化  
の波を…!!」

「唯一性』『個性』  
でしょう  
アートってのは

「やんちゃ  
しましうよ  
日比野さん」

これこそ「やんちゃな  
内なる野望…!!」

ほらっ

「まったく…  
単純ね…  
でも、なんかスゴク  
面白いことになって  
きたみたい…!!」

あ！  
その  
かんこんそうさい…  
美術教室…  
住宅…

おもしろい!!

**藝大アートプラザ**  
東京都台東区上野公園 12-8 東京藝術大学美術学部構内 ☎050-5525-2102  
営業時間：10:00～18:00 定休日：月曜（月曜が祝日の場合は営業し、翌火曜に休業。  
企画展最終日の翌日と翌々日の2日間は休業）＊企画展情報はP42をご覧ください

まあ  
飛びこえ  
たいんで  
すよ…

# 1 時間目

音楽学部  
指揮科

## 「神だって汗をかく」

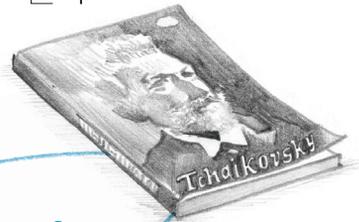
映画監督、プロ野球チームの監督、オーケストラの指揮者。「男性が一度はやってみたい職業」のトップ3だという。要は、プロ精鋭集団を率いるマエストロ。いやあ、女子だってなりたいですよマエストロ。その三大巨匠のひとつを育てる学科、もちろん藝大にあるんです。

秋も深まる11月某日にお邪魔した音楽学部指揮科の教室。中央には、どどんとグラランドピアノが2台。その先に、絨毛氈敷きの指揮台が鎮座していた。これから行われるのは、年明けの進級・卒業試験に向けての実技指導。5人の学生が台に乗り、複雑なスコアを分担して弾く2人のピアノスト（いちいちオーケストラを招集していたら大変だもんね）に向けて指揮棒を振るのだという。

5人？ あら今日は少ないのねと思っちゃいけない。1年生から4年生で5人。何せ、藝大指揮科の入学定員は1学年2名！ 門の狭さを誇る藝大でも指折りの超、超、超狭き門を突破してきた、マエストロの卵たちなのだ。

「指揮者はそんなに必要なのかって？ いや、教える側が少ないからこの人数だけで、世の中

高関教授。中学2年で指揮者を志し、ベルリン留学中の若き日には、あの巨匠中の巨匠・カラヤン氏のアシスタントを務めたことも。



## 授業 SANKAN

目指せ  
マエストロ編

春は巣立ちの季節。そして芽吹き季節。音楽、美術両学部でも、次世代の芸術を担う巨匠（の卵）が育ってます。

挿絵＝小柳景義 文＝大谷道子

的に指揮者の数は足りていないですよ。オペラならアシスタントの指揮者も必要だし、ベートーヴェンの第9には合唱の指揮者が要る。指揮者といっても、実はいろんな職種があるんです」

指導するのは、国内外で交響曲やオペラを指揮するバリバリの現役・高関健教授。チャイコフスキーの5番。メンデルスゾーンの3番。「悲愴」の名で知られるチャイコフスキー6番。シューマン4番。モーツァルト41番は、あの有名な「ジュピター」。いずれ劣らぬ大曲に学生たちが挑むと、要所要所で高関先生の鋭い声が飛ぶ。

「ちゃんと頭の中でメロディーを歌ってる？ 歌うと、実際にテンポが良くなるんだよ。自分がテノールのパートを持っていると思っても、もう一度」（テンポは）上から引く張っても早くならない。むしろ、後から押すイメージで。重いものを動



1年生には文字通り“手取り足取り”の指導をし、上級生とは白熱した楽曲解釈を戦わせる。

かすときつて、そうしたほうが動くでしょ？」

「出だし、もっとバーンといけない？ 『俺は神だ！』とか、そういう感じでき。嫌いなヤツを川に投げ込むようなつもりでやってみてよ」

「うーん、骨組みの部分は振れてるんだけど、それだと何だか壁のない家みたいに聴こえるんだなあ。柱より壁が大事な曲もあるからね」

独特なたとえ（先生、ご自宅を建設中だとか）と身振り手振りの実演を交えた指示に、学生たちが必死に応える。意外なのは、「そんなに振らなくていい」という指摘が多いこと。

「手が無意識に動いているというのは、大問題ですよ。指揮者が腕を動かすのはすごく影響が強いんだから、そんなに振つたら演奏者に迷惑。それに、あなたの表情が見えないでしょ？ 表情だけで音を出させる、顔で仕事するくらいでない」と

ほおお。しかし、この指揮者が冷や汗をかいている状況、何だか新鮮だ。必死な学生たちには申し訳ないが、指揮者に厳しい指示を受けてきた吹奏楽団経験者としては、少々痛快ですらある。だって、指揮者は楽団にとっては一種の神様だもの。



学生の襟付きシャツ・ジャケット・革靴率高し。人を束ねる身ゆえ、やはり服装もそれなりに。

# 指揮科

すべての音の生殺与奪を握る者。だが、「指揮者は、偉くもなんともないですよ」と高関教授。

「だいたい、弾いている人はずっと指揮者を見るわけじゃないですから。それどころか、『あいつ嫌い』って思われたら、見てももらえない（笑）。それが、我々指揮者の宿命なんです」

見て、動いてもらうためには、まずは勉強。楽譜をとことん読み込んで、作曲者の意図を汲む。過去の名演を聴き込むことも勉強のひとつだが、となるとYouTubeで見放題聴き放題の今の学生たちは、たいへん恵まれているのでは？

「でもね、スマホで何でも見られるけど、スマホって基本『何かしながら』でしょ？ 集中できないですよ。レコードしかなかった我々の時代は、いったん聴き始めたら、電話が鳴ってもそれを布

団にくるんで、一生懸命聴いたものです」

目を凝らし、耳を肥やして、そのうえで自分なりの曲の組み立てをして、それを演奏者に伝える。「たくさん質問を受ける立場だから、人間的には誰とでも話せて、説明できることは重要ですね。私も学生時代は苦手だったけど、たくさん鍛えられて、ようやく話せるようになってきたかな」

マエストロは一日にして成らず。そりゃあ、汗もかきますわ。でも、一日一日、演奏ごとにかくその汗が、必ず自信になる……と信じて、若者たちはタクトをかざす。さあ、もう一度。

## 時間目 「ツツコミは愛ゆえに」

美術学部  
建築科

さて、美術領域でマエストロ感のある職業といえば、やはり建築家ではなからうか。デザイナーを問われるのはもちろん、大プロジェクトともなれば、チームを率い、職人集団をまとめ、クライアントの厳しい要求に応えなければならぬ「棟梁」なのだ。そのカリスマ性はいかにして見いだされ、磨かれるのだろうか？ というところで、年明け1月に行われた卒業制作・修士制作発表会の一部を覗かせてもらった。

# 建築科

2日間で4年生11名、修士29名(論文含む)

を審査するという、教授陣には超ハードなスケジュール……なのだが、何だかね、おしゃれなんですよ皆さん。何度か藝大にお邪魔してますが、教授の着ている服が欲しいなんて思ったのは、私、初めてでございます。確かに、雑誌やテレビで見る建築家って、装いにポリ

シーを持つ方が多いもの。あの先生のニット、流りのビッグシルエットだなぁ、あちらの先生、Tシャツだけど、うわあタグがマルジェラだ……と、いかんいかん、学生たちにとっては天下分け目のプレゼンデーである。

初日は4年生。発表の持ち時間はひとり5分、教授方との質疑応答10分。それぞれが独自のコンセプトに基づく建築プランをレジュメ、イメージ図、模型などを用いてプレゼンしていくのだが、これが実に多彩。東京スカイツリーを超高層水族館にリニューアルする案(500メートルのツリー内を魚がパイプで回遊!)、横浜市の古名勝・金沢八景を現代によみがえらせるランドスケープ

デザイン、多摩川河川敷に犬と人の新しい出会いの場を「犬築」(ケンチク!)、木場の水路に浮かぶ「陸船」を水上劇場に、中野駅のビル上の看板建築群をライブ会場に……などなど、愉快で刺激的な案が展開される。素人は楽しく聞き入るが、そこは卒業制作。教授陣からはズバズバ、雨あられと厳しい指摘や質問が降り注ぐ。

「水族館の水槽って魚ごとに環境が別々だけど、それをちゃんと考えて設計してあるのかな」  
「この景色に気象条件や時間帯は影響しない?」  
「水位の変化に建築はどう対応する?」

「犬が快適に過ごせ

たとしても、それだけでも

ともとの動物愛護の問題は解決しないのでは?」

「多くの人や機材はどんな動線で移動するの?」

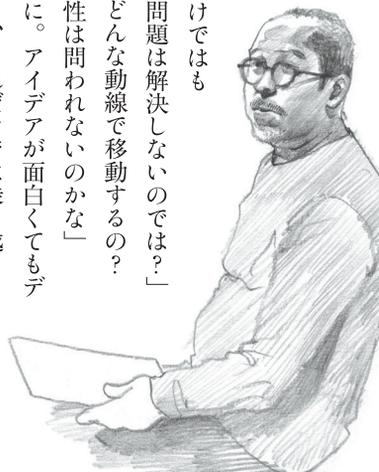
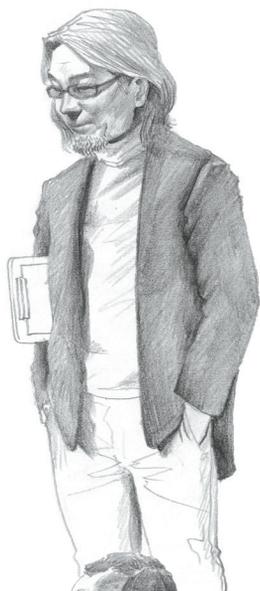
あと、容積率の違法性は問われないのかな」

んんん、たしかに。アイデアが面白くてもデザインがユニークでも、それだけでは乗り越えられない現実的なハードルが、建築にはいくつも存在する。人が集まり、安全に使用する場を造るには、法務の諸問題をクリアし、安全性を担保しつつ、経済性まで鑑みた設計であることは必須。クリエイティビティだけでなく、つくり手としての倫理観や哲学までも厳格に問われる仕事なのだ。

しかし、やはり新しい建築には夢や驚きがあったほしいもの。午前中のハイライトは、4年生の島津利奈さんによる、東京湾の汐留川水門と築地川水門を結ぶ場所に水上葬儀場をつくる案。タワーマンションや東京五輪の選手村などの建築ラッシュに沸く、今もつとも「生」を感じさせる場所に、生と背中合わせの「死」を受容する場、という提案だ。

ご遺体と人の動線、建築に使う素材から、参列者の交通の確保まで、数々の質疑応答のあと、ひとりの先生がぼつりと漏らした。

「この建築に合う、いい言葉があるよね。彼





岸（生と死を超越した理想の境地）について」

ほう、と一同、ため息を

つく。人生の彼岸と東京の

彼岸。皆のイメージがひと

つになるこの瞬間は、ロマン

が共有できてこそ生まれるものだろう。

明けて翌日は、修士制作の審査。午前論文審査を経ての午後の審査は、校舎前の庭で始まった。

一隅にあるのは、遊具のような木製の橋。その名も「木枝橋」は、文字通り昨年9月の台風で折れた上野公園の木の枝を材料につくったものだという。単なる廃材利用の作品ではなく、枝一本ずつを3Dスキャンしてサイズと形状を登録し、重量を量ったうえで精緻に組み立てられた構造物。つまり、枝という自然物（強度が保証されないため、建築基準法上は建材として使用できない）を構造計算に乗せ、そのエビデンス（証拠）を得る挑戦なのだ、傍らの先生が教えてくれた。

その出来栄は「乗ってみてもいい？」と教授陣が身を乗り出すほど（勘弁してください、と設計者苦笑）。しかし、そんな作品にも「自然物のように、構造を思わせない構造であってほしかった」この



注目を集めた「木枝橋」。枝の絡まりが鳥の巣を連想させるが「ここに鳥が巣をつくってくれと、もったいい感じになる」と設計者・眞船峻さん。

作品の何を評価すべきか、ポイントを示すように」などの指摘が。感動だけでは終わらせない、それが建築のプレゼン道。学生たちが表現できていない作品の美点や価値を引き出す、先生方の愛あるツツコミに舌を巻く。「美術学部で、社会に出るために国家資格が

必要なのは建築だけ。だからどうしてもシビアに見る部分はありますね」とは、建築理論が専門の光井渉教授。社会性とスケール感が厳然と審査され、かつ多くの人を動員して仕事が進められる建築の世界では、アイデアの良し悪しだけでなく「いかに説明するか」の手腕も問われるという。「ロジックの一貫性をどうつくるかも、多くの人を動かすために必要。論理が一貫していれば、伝えることができますから」とは、建築デザイナー・藤村龍至准教授の言。プレゼンの手法、模型やビデオの必要性なども含めた今回の実践、そして教授方からの愛ある指摘によって得た数々は、学生たちの今後にきつと生かされるだろう。

今後も学びを続けて独り立ちの道を模索する指揮科&建築科。マエストロへの道は長い、第一歩は進級、そして卒業だ。この号が出る頃にはすでに決着がついているはずだが、未来の巨匠たち皆々に明るい春が訪れていることを祈る。



藝える人

# 荒井里桜

音楽学部器楽科  
ヴァイオリン専攻2年

あらい・りお / 1999年東京生まれ。第87回日本音楽コンクールで第1位獲得をはじめ、数々のコンクールで入賞。2016年度藝大宗次徳二特待奨学生。



藝高時代に「ハマった」という卓球。ヴァイオリンの練習の合間に友人たちと遊んだ、思い出の卓球台で。

目覚ましい活躍に、ヴァイオリニストとして将来を期待される荒井さん。実は練習が好きではなく、野望を抱いたこともなかったという彼女が、今、弾く理由について。

### めざめ…どう弾きたいか、という欲

ヴァイオリン教室に通い始めたのは5歳の頃。そのスタートは、ヴァイオリニストの中では早くも遅くもなく、至って普通らしい。「毎日練習するのがとにかく苦痛でした(笑)」。続けたいと思っていたわけでもないし、かといってやめる理由もなかったというのが本音です」。なんとなく続けていたという彼女だ

が、中学で出会った先生に勧められ、藝高へ進むことに。「それまでは、どう弾きたいのか、自分の意思があまりなかった。ヴァイオリンが本当に面白い、と思えるようになったのは高校に入ってからでした」

2年生の時、国内外で活躍しているヴァイオリニストの演奏を聴いて感銘を受けたのだとか。それを機に、練習に打ち込むようになった。「朝練だって苦じゃないほど(笑)。やっと、ただ弾いているだけではなく、自分の音へのこだわりが出てきたことがうれしかった」

### まよい…表現を豊かにするために

大学1年になると、「東京音楽コンクール」で1位に輝いた。昨年は、若手音楽家の登竜門といわれる「日本音楽コンクール」でも見事、優勝。「確かに少し自信はつききました。でも、上には上がいますから。自分の演奏を録音してみると、まだまだ平坦に聴こえる。コンサートでは目からも耳からも感じる事ができるけれど、音源だけでも感情や色が見え



現在練習に使うのは、某財団より貸与されている1779年製の名器「ガダニーニ」。

てくるようにならないと。表現の幅を広げることが課題ですね」。そのためには？と尋ねると、「本場で、自分の目で感じて感じたい」と。留学を見据えている。だが、迷っている。「意外と切磋琢磨できる環境じゃなかった、なんて話も聞くもので……。習いたい先生と出会えるかどうかも重要ですね」

### ゆめ…ソリストとして

「ヴァイオリンって声と似ていて、自分の感情が音に出やすい楽器だと思うんです。それを人に伝えることができるって、やっぱりいいな、と思います。この人の演奏が聴きたいと思ってもらえるように、ソリストとして虜にするものを身につけないと」。その将来は、そう遠くなさそうだ。

# お知らせ

今後の催しや大学のさまざまな取り組みを紹介

## 藝大にゲーム学科ができた？ コースは本当にできました

大学院映像研究科では、「東京藝術大学にゲーム学科ができた」という仮定のもと、修了生の中から5人のディレクターを選出し、彼らを「第0年次」の研究生として、ゲーム会社と連携して作品制作を行いました。さらにその成果発表の場として、2018年11月2〜4日、『東京藝術大学ゲーム学科(仮)「第0年次」展』を本学COO拠点アーツ&サイエンスラボで開催。内覧会では、南カリフォルニア大学(USC)映画芸術学部

ゲーム&インタラクティブ学科の准教授2名と学生3名が来日し、講評会が行われました。内覧会を含め3日間の開催でしたが、500名を超える来場者があり、関心の高さがうかがえました。

なお、同科では2019年4月から、アニメーション専攻およびメディア映像専攻に2年間のゲームコースを開設しました。ゲームを芸術の一分野として捉え、ゲームを中心とした制作・研究を行います。



左から、岡本美津子副学長、ジェーン・ピンカード USC 准教授、アンドレアス・クラツキー USC 准教授(本学卓越教授)、澤和樹学長、桐山孝司大学院映像研究科長

## L.A. で『四季』のアニメーション &生演奏のコンサートを開催

ヴィヴァルディによる名曲『四季』の音楽世界を大学院映像研究科がアニメーション化。本学および南カリフォルニア大学(USC)両音楽学部の精鋭学生と澤和樹学長のコラボレーションによる生演奏に合わせて、音楽と映像の同期上映を行うコンサート『音楽とアニメーションの調べ』



「音楽とアニメーションの調べ in L.A. 東京藝大×USC」の一幕

「L.A. 東京藝大×USC」を2019年1月13日に米国・ロサンゼルス(Aratan Theatre)にて開催しました。演奏のたびに速度などが微妙に変化する生演奏に合わせて、藝大COOがヤマハと共同開発中のA1技術によりアニメーションを同期上映する試みは世界初。当日は満席でキャンセル待ちが出るほどで、終演後は盛大な拍手が寄せられました。また、1月15日には、ジャパン・ハウスロサンゼルスにて『アニメーションの調べ』を日米学生アニメーション上映会を開催。映像研究科とUSC、カリフォルニア芸術大学(CalArts)による革新的な短編アニメーションを上映しました。



## オリンピック金メダル級!? 藝大生が日本人初の快挙達成

2018年9月、ドイツ・ミュンヘンで行われた第67回「ミュンヘン国際音楽コンクール」で、大学院音楽研究科の秋元孝介さん（ピアノ・博士後期課程在籍）、伊東裕さん（チェロ・修士課程在籍）、そして修了生の小川響子さん（ヴァイオリン・18年3月修士課程修了）による「葵トリオ」が、ピアノ三重奏部門で見事、第1位に輝きました。

本部門での日本人入賞は初めてで、澤学長いわく「このコンクールでの優勝は、オリンピックで金メダル級の快挙」とのこと。

ちなみに小川さんは前号でご紹介した、藝大からベリン・フィル・カラヤン・アカデミーへの派遣学生第1号。今後の活躍にもぜひご注目ください。



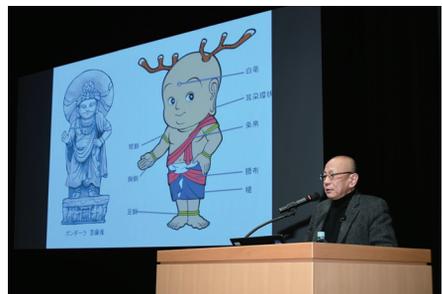
## 多様な植生の生け垣が拡大中! 藝大ヘッジ第4弾の植樹レポート

キャンパス環境改善の一環「藝大の森」プロジェクトでは、大学を取り囲む塀や柵を、緑によるやさしい境界へと置き換える取り組みを2年前から手がけています。上野公園側の縁から始まり、正木記念館の道路側へと延伸し、今回の第4弾では赤レンガ1・2号館の前を50mにわたって武蔵野由来の常緑・落葉樹による混植の生け垣にしました。

植樹ワークショップ当日は12月にもかかわらず暖かい気候に恵まれ、澤和樹学長ほか教職員や学生、OB/OG、地域の方を含む一般参加者、行政の方々も加わり、約60名が参加。37種、約870本の苗木が丁寧に整然と植えられました。

なお、この取り組みは第3回台東区景観まちづくり賞（活動部門）を受賞しました。

## シルクロードをテーマに 日中交流シンポジウム



2018年12月13日に日経ホールにて日中平和友好条約締結40周年記念「シルクロード国際シンポジウム&トークセッション」を開催しました。第1部では、龍谷大学学長の入澤崇先生による「シルクロード研究への日本の貢献」、敦煌研究院

の張元林先生による「敦煌—シルクロード文化の宝庫」など、日本と中国の研究者がシルクロードをテーマに講演しました。

第2部では、藝大卒業生の山下靖喬さんが津軽三味線演奏で会場を盛り上げたあと、藪内佐斗司教授の講演「ほとけの意味と私たち」、いとうせいこうさんとみうらじゅんさんによるトークショー「仏像大使、シルクロードを語る」が行われました。入場者数は延べ1000人を超え、1部、2部とも大好評でした。



『東京藝術大学の彫刻と深井隆 1951～(2018)～』は美術学部彫刻科の深井隆教授と合同会社「Dの3行目」による共著 3500円+税

## 日本における彫刻・美術とは？ 藝大出版会の新刊

藝大出版会では、深井隆教授らによる『東京藝術大学の彫刻と深井隆 1951～(2018)～』を出版しました。1970年代後半以降の日本における彫刻・美術とは何であったのか、そして今それは何であるのか。

本書は彫刻家・深井隆の視点を通じた70年代後半から現在までの東京藝術大学の彫刻、さらには日本の現在の美術の姿を、教えずである原真一、小谷元彦などとの対話や豊富な資料により浮かび上がらせることで、その答えへの一つの手がかりを示そうとするものとなっています。

藝大出版会の書籍は、藝大アートプラザでも販売中。最新情報は公式ツイッター (@GeidaiPress) にて発信しています。

## 藝大と都美館が進める ウワサの「とびらプロジェクト」



2012年に始動したとびらプロジェクトとは、東京藝術大学と東京都美術館が連携して行っているソーシャルデザインプロジェクトです。毎年広く一般からアート・コミュニティ（愛称…とびら）を募集し、現在約140名のとびらが東京都美術館を拠点に活動しています。

アート・コミュニケータとは、さまざまな文化施設や地域の文化資源を創造的に捉え直し、世代や国籍、障害の有無などを問わず、誰もが共生できるコミュニティをアートや文化財を介して築くことを目指す人々。現在その活動は他の地域にも広がりを見せ、従来の市民参加活動とは異なる新しいあり方に、期待が寄せられています。

## 毎回テーマを変えて開催 藝大アートプラザの企画展



藝大と小学館が共同運営する藝大アートプラザ（P32～33参照）では、毎回テーマを変えて企画展を行っています。今後は『おめでとう！の春色展』（3月21日～4月21日）、『猫展』（4月26日～5月26日）、『ちっちゃな絵画―サムホール展』（5月29日～6月16日）、『デザイン科展』（6月19日～7月7日）、以降、『藝大×子ども展』『藝大×マンガ展』『藝大アートプラザ大賞受賞者招待展』『オープン周年記念―冠婚葬祭展』などを開催予定（展覧会名、会期は変更する場合があります）。展示作品は藝大の学生、教職員、卒業生の手によるもので、基本的にすべて購入することができます。ぜひお気に入りの作品を探しにお越しください。



ラファエル・コラン《田園恋愛詩》  
1882年 東京藝術大学蔵



大学美術館 本館

## 大学美術館各館の 展覧会

### 大学美術館 本館

藝大コレクション展 2019  
第1期…4月6日～5月6日  
第2期…5月14日～6月16日  
※大幅な展示替えがあります

### 大学美術館 陳列館

第3回国際芸術創造研究科アートプロデュース専攻キュレーション領域  
Count the Waves 見えないものをつなぐ  
3月21日～4月7日



円山応挙《松に孔雀図襖》(全16面のうち4面)  
重要文化財 1795(寛政7)年 兵庫・大乗寺

円山応挙から近代京都画壇へ  
8月3日～9月29日



東京インディペンデント 2019  
4月13日～5月5日

保存修復日本画研究室 創作発表展  
(仮)  
5月9～15日

彫刻科企画展(タイトル未定)  
5月中旬～6月初旬

研究報告発表展(保存彫刻)  
6月5～13日(仮)

日本画第二研究室 素描展(絵画科)  
6月15～28日

GAP専攻ユニット授業成果報告及び、GAP修士2年生展覧会

7月上旬～中旬

工芸科学部3年生、工芸総合演習の課題展示及び講評会  
7月24～26日

展覧会(建築科)



奏楽堂

## 奏楽堂の演奏会

8月上旬～中旬  
日本画第一研究室 研究発表展  
8月27日～9月12日  
COI拠点複製技術展(仮)  
9月中旬～下旬

### 奏楽堂(上野)

同声会新人演奏会  
4月13日 1部13時 2部18時  
2000円

藝大フィル定期第391回  
新卒業生紹介演奏会

4月19日18時30分 15000円  
モーニング・コンサート第1回  
4月25日11時 10000円



2018年の『モーニング・コンサート』より

モーニング・コンサート第2回  
5月9日11時 10000円  
モーニング・コンサート第3回  
5月16日11時 10000円  
モーニング・コンサート第4回  
5月23日11時 10000円  
藝大フィル定期第392回  
5月31日19時 30000円  
オード・オールトマット&クリスト  
フ・マントゥー オルガン演奏会

6月2日15時 20000円  
創造の社

6月7日19時 30000円  
藝大チェンバーオケ定期第33回  
6月9日15時 15000円  
モーニング・コンサート第5回  
6月13日11時 10000円  
シンフォニーオケ定期第59回(藝大  
定期第393回)

6月13日19時 15000円  
モーニング・コンサート第6回  
6月20日11時 10000円  
モーニング・コンサート第7回  
6月27日11時 10000円  
藝大とあそぼう  
6月29日14時  
高校生以上10000円 小中学生  
5000円 未就学児無料 3歳未  
満入場不可  
モーニング・コンサート第8回  
7月4日11時 10000円  
ウインドオケ定期第87回  
7月6日14時 一般15000円  
高校生以下5000円  
モーニング・コンサート第9回  
7月11日11時 10000円



2018年の『藝大第九～チャリティーコンサート  
vol.2～』より

藝大第九

7月14日15時  
全席指定 50000円  
モーニング・コンサート第10回  
7月18日11時 10000円  
モーニング・コンサート第11回  
9月5日11時 10000円  
和楽の美  
9月12日18時30分 入場料未定



2018年の『和楽の美』より

\*展覧会・演奏会の名称、会期・  
日時などが変更になる場合があります。  
最新情報は、東京藝術大学公式  
ウェブサイト(<https://www.geidai.ac.jp>)をご覧ください。

\*展覧会についてのお問い合わせ  
東京藝術大学美術館

☎03-5777-8600

(ハローダイヤル)

\*演奏会についてのお問い合わせ

東京藝術大学演奏芸術センター

☎050-5525-2300

\*演奏会チケットの取り扱い

ヴォートル・チケットセンター

☎03-5355-1280

チケットぴあ

☎0570-0219999

藝大アートプラザ(店頭販売のみ)

☎050-5525-12102

東京文化会館チケットサービス

☎03-5685-0650

イープラス

<http://eplus.jp/>

## ○藝大基金寄附者ご芳名

東京藝術大学基金(藝大基金)へ温かいご支援を賜りました皆様に、深謝申し上げます。  
本号では、2018年7月から2018年12月までに寄附の申し込みをされた皆様に  
掲載させていただきます(掲載をご承諾された方のみ)。

### [個人の皆様]

|              |             |              |        |
|--------------|-------------|--------------|--------|
| 井出久實子様 100万円 | 古川誠様 2万円    | 村上徳子様 1万円    | 小宮里美様  |
| 中村真紀子様 100万円 | 渡邊哲雄様 2万円   | 門田伸一様 1万円    | 志賀久子様  |
| 真鍋隆輝様 100万円  | 小倉文三様 1万5千円 | 雪野潔様 1万円     | 島田真千子様 |
| 山田直美様 100万円  | 青柳貴夫様 1万円   | 渡辺素子様 1万円    | 清水晴雄様  |
| 大谷祥子様 50万円   | 阿部博子様 1万円   | 鷲尾浩昭様 5000円  | 酒々井夏子様 |
| 志村明善様 50万円   | 蟻川隆正様 1万円   | 稲垣孝子様 3000円  | 瀬川幸枝様  |
| 伊藤和子様 30万円   | 池辺幸子様 1万円   | 福岡新五郎様 3000円 | 出倉令子様  |
| 村上晃夫様 30万円   | 池辺晋一朗様 1万円  | 丸茂昌彦様 3000円  | 新居浩様   |
| 山本清様 10万円    | 石黒秀子様 1万円   | 久保法之様 2000円  | 新島治男様  |
| 市川直子様 5万円    | 岡本達三様 1万円   | 諏訪部信一様 2000円 | 早川圭子様  |
| 金井妙智様 5万円    | 小川恒子様 1万円   | 秋葉桃子様        | 平山聡子様  |
| 川上祐治様 5万円    | 小原加奈子様 1万円  | 有坂恵美子様       | 古孝行様   |
| 杉村佳代子様 5万円   | 金濱陽子様 1万円   | 稲垣実様         | 本多佐保美様 |
| 田中寧様 5万円     | 小松幹太様 1万円   | 稲川弘明様        | 本多万里子様 |
| 富澤儀一様 5万円    | 斎藤栄子様 1万円   | 岩城修様         | 松延瑞穂様  |
| 廣田和美様 5万円    | 澤英俊様 1万円    | 内田正巳様        | 松本良人様  |
| 前川滋子様 5万円    | 末積三千子様 1万円  | 小栗茂様         | 村上和邦様  |
| 水原光代様 5万円    | 鈴木敦子様 1万円   | 片見京子様        | 村上眞理子様 |
| 八重野範夫様 5万円   | 前後皓子様 1万円   | 川瀬麻規子様       | 森智子様   |
| 柳澤美枝子様 5万円   | 武内園子様 1万円   | 木原裕司様        | 横橋政夫様  |
| 御木マドカ様 4万円   | 千葉真知子様 1万円  | 栗林理人様        | 吉田久美子様 |
| 千田泰子様 3万円    | 永坂友康様 1万円   | 小石川和代様       |        |
| 谷口四郎様 3万円    | 中出陸様 1万円    |              |        |
| 船津武様 3万円     | 中村篤様 1万円    |              |        |
| 三浦さえ子様 3万円   | 原谷百代様 1万円   |              |        |
| 村上雅章様 3万円    | 平尾猛也様 1万円   |              |        |
| 岩坂實様 2万円     | 平松雅子様 1万円   |              |        |
| 後上友美様 2万円    | 福澤波子様 1万円   |              |        |
| 後藤えま様 2万円    | 古俣健様 1万円    |              |        |
| 高木早苗様 2万円    | 星和好様 1万円    |              |        |
| 高橋篤也様 2万円    | 細谷和夫様 1万円   |              |        |
| 田所厚一郎様 2万円   | 峯佳代子様 1万円   |              |        |
| 長谷川瑞枝様 2万円   | 美濃部猛様 1万円   |              |        |
| 羽鳥健司様 2万円    | 宮城強様 1万円    |              |        |

### [法人の皆様]

|                       |
|-----------------------|
| 株式会社平成建設様 300万円       |
| 株式会社聖ルカレジデンス様 40万円    |
| 合同会社アンブラッド様 5万円       |
| 特定非営利活動法人上野芸友倶楽部様 5万円 |
| 株式会社大成工業様 3万円         |
| 長唄女子東音会様 5000円        |
| 株式会社伊豆築様              |
| 株式会社GTM 総研様           |

## ○藝大基金のお願い

「藝大基金」は、東京藝術大学の長期的・安定的な財政基盤として、教育研究活動や社会連携活動の一層の発展と、我が国における芸術文化の振興などに資することを目的に設立されました。各種プロジェクトなどの実行と、学生へのさらに充実した支援体制を築くため、広く地域社会や企業などの皆様からご寄附を募っております。藝大基金の趣旨にご理解をいただき、ご支援を賜りますようよろしくお願いいたします。

### ☎お問い合わせ

藝大基金事務局 ☎ 050-5525-2400

藝大基金ウェブサイト <http://fund.geidai.ac.jp/>

### ☎編集部より

『藝える』編集部では、皆様からのご意見・ご感想などをお待ちしています。今号の内容についてのご感想や、今後のご要望などありましたら、こちらまでお寄せください。

〒110-8714 東京都台東区上野公園12-8

東京藝術大学内 『藝える』編集部

Fax : 03-5685-7761

E-mail : [toiawase@ml.geidai.ac.jp](mailto:toiawase@ml.geidai.ac.jp)